

スラヴ語の名辞類について

—言語類型学の観点から—

山田 勇

- I はじめに
- II ブルガリア語の名詞
- III ブルガリア語の形容詞
- IV ロシア語の名詞
- V ロシア語の形容詞
- VI おわりに

参考文献

I はじめに

本項ではスラヴ諸語のうち、東スラヴ語のロシア語と南スラヴ語のブルガリア語の名辞類を分析する。これらの言語は言語類型論から見るとそれぞれ、発達の方向性が、極めて対照的である。ロシア語既習者がブルガリア語に接すると、文法体系、ことに統語環境は著しく英語に近いことに気づく。ブルガリア語では、名詞の活用が、他の印欧語に比べても著しく退化しており、その論理的帰結として、中国語のようにある名詞はすべての格助詞を内包し、その文脈での意味が重要になる。この結果、英語と同様な形態論的、統語論的姿が立ち現れることとなったのである。簡単にこのことにさらに触れておくと、前者では、英語同様、冠詞が異常に発達するところとなり、それも、名詞に後置する形の接辞が発達した。これを後置詞と呼んでいる。これらの瞥見からも窺い知れ

る如く、当然ながら、ブルガリア語はかなり著しくロシア語とは特徴を異にする。それらの特徴の差異は音韻、語彙論、形態論、統辞論に著しく現れている。

現代ブルガリア語のもっとも顕著な特徴としてあげられるのは、名詞類がロシア語と異なり、分析的に表現されること、換言すれば名詞、形容詞、数詞がほとんど活用を欠落していることである。統語環境での文意解釈の手段は、補助詞、殊に前置詞にその多くが委ねられることになる。また名詞には、その特殊な形態論的手段を伴った文法範疇の限定辞が配置される。後置詞である。さらに、統語法では先に触れたように、代名詞の重複あるいは、名詞の代名詞的反復の現象が現れた。

ブルガリア語は全ての残りのスラヴ諸語とは発展の過程がちがっているが、その変化の要因はこの言語が、マケドニア語などと共に、他の近隣の非スラヴ諸語であるルーマニア語、アルバニア語、現代ギリシャ語、トルコ語等の言語を操る人々と共に存して、ある種の言語同盟を形成してきたこととあながち無縁ではない。これら地域の諸民族が十分長い時間をかけて馴染んできたことが相互の言語の近しい関係を構築してきたとも言えるのである。

この様な観点から、東スラヴ語のロシア語と南スラヴ語のブルガリア語の名辞類を対照記述する。

II ブルガリア語の名詞

2. 1. 名詞の性

現代ブルガリア語の品詞システムは、次のごとく語彙論形態論クラスでは他のスラヴ語と共通する部分が多い。つまり形態論で重要なのは名詞、形容詞、動詞、副詞である。他のスラヴ語同様、ブルガリア語の名詞は男性、女性、中性からなり、また性の範疇では、名詞は形容詞、代名詞、動詞と一致する。これらの分類は、ロシア語と同様、語尾の音韻でなされる。

男性名詞はゼロ語尾であり、名詞の基本形である。молив, мъж, стол, труженик, кон, площа́д。しかしこれには若干例外がある。それはロシア語と異なり、-a, -o で終わる男性名詞がある。дядо, бояджия, баща, чи́чо。

名詞の文法性の判別

男性単数	女性単数	中性単数
-съгласна, 子音 ø (ゼロ) 語尾	-а, -я -съгласна, 子音	-о, -е

女性名詞は語尾が -a (正書法上は -a と -я) で終わる。例 : вода, стая, къща, зима, хартия。しかし語尾が

ゼロに終わる女性名詞も若干ではあるが存在する。éсен, пролёт, вечер, пёсен。女性名詞で -ост と言う語尾で終了するものがある。例 : младост, старост など。

中性名詞は語尾が -o, -e に終わる名詞を指す。例 : село, око, момче, момиче, лято。また中性名詞には母音 -y または -и に終わる一連の外来借用名詞がある。この種類にはゼロ語尾のものもある。такси́, мен ю。

斯様にブルガリア語の文法性の分類はロシア語のそれと概ね類似であるものの、ロシア語と同形の名詞でも文法性が一致しないものが見られる。例えば ブплощад (男.), ロ площадь (男.), ブ вечер (女.) ロ вечер (男.) ブ яблка (女.) ロ яблоко(男.) のような名詞である。

ブルガリア語の名詞には他のスラヴ語とは際立った対照を見せる部分がある。それは格活用を殆ど失ったことである。それで、名詞の原形は男性名詞単数共通形であり、すべての統語機能を果たすことができる。これに対して既に文中で言及されたことを意味する定形や後置詞による既出表示形を一方の局にすえることができる。Молив, мъж, стая, есен, момче, яблка など。

2. 2. 名詞形容詞の複数

ブルガリア語名詞の数範疇は原則的に他の東スラヴ語の同じ範疇と性質をわかつものではない。その構造的中心となるのは単数と複数の対立である。

ブルガリア語女性名詞は語尾 -и によって複数形を形成する。жена — жени, стая — стаи, радост — радости, нош — ноши. 男性名詞

名詞の複数形

-и	-ове	-я	-а (-та, -на)
----	------	----	------------------

は語尾 -и と -ове によって普通複数形を形成する。語尾 -и は普通、多音節名詞の場合に用いられる。 учител — учители, молив — моливи, площад — площади。ここで、名詞語幹が後舌音で終わる場合、複数形形成時に、歯擦音に交替し、母音 и の前にある к は ц に交替する。同様に г は з に、更に д は с に交替する。 език — езици, вестник — вестници, филолóг — филолóзи, монах — Монаси。第2の語尾 -ове は单綴語幹で用いられる。その際、複数形でアクセントは語幹に維持されるが、それ以外のいろいろな変化語尾音節ではその位置は移動する。влак 列車 — елáкове, стол — столóве, град — градовé。中性名詞は語尾 -а または -ета によって複数形を作る。これらの内、最初のものは -о に終わるものと、部分的に -е に終わる名詞单数形である。село — селá, огледáло — огледалá, лицé — лицá。

この変化語尾に特徴的なことはこの活用が -и(j) に終わる語幹名詞に付く場合を除いて单語中でアクセントを移動させる傾向があることである。събрáние — събрáния. 第2の語尾 -ета は单数で変化語尾 -е を持つ名詞の集合につけられ、アクセントの変更は生じない。момчe — момчéта, кúче — кúчета, морé — морéта.

記述されたような法則の他にいろいろな性の名詞のグループに見られる複数形を形成するまれな方法が若干存在する。それら例外の中で最も重要なものだけをあげてみる。ръкá — ръцé, крак — кракá, око — очí, ухо — уши, рамо — раменé (すべてあげられた例は二対を意味する古代の双数形の痕跡である。) さらに мъж — мъжé, брат — братя, човек — хóра のペアがある。(ロシア語にも補充法のペアがある。человек — люди)。

2. 3. 音素の若干の歴史的交替

名辞類が複数形を形成する場合、次のように、母音の極めて特徴的な音韻交替が生ずる。

1 硬子音前のアクセント音節に母音の [a] が置かれると、これらの条件から何かが奪われる必要が生じ、これらのアクセントを失うか、軟化された子音の前で、それが次の様に母音 [e] に変わるような場合がある。голям — големи

(голями とはならない。), бял — бели, бряг — бреговé。(文法性の変換の場合もある。 тесен, だが т эсна など。) 現代ブルガリア語の方言でしばしばこの交替が見られる。しかし、標準語ではそれは歴史的性質を持っているということである程度説明できる。それらの現象は以前の教会スラヴ語の時代の т の位置でのみ存在するからである。そこで пол эна — пол эни の場合だが、 т は存在しなかつたが、まさにそれで、音韻の交替が生じなかつたのである。

2 音素 e と ѿ は音声学上の「ゼロ」音と交替する。これは弱化母音のいろいろな運命が反映される、いわゆる、出没母音である。知られているように、特定の史的段階で、弱化母音は弱い位置では消えるが、強い位置では現れ、完全な母音に変わるものである。例えば、单語、дънь で最初の弱化母音は強い位置にあり、後者のそれは弱い位置にあるので、その結果、現代ブルガリア語では ден の形をとる。ロシア語の день は最後の子音が軟音であるが、これは消滅した弱化母音の痕跡である。дни の語形では、弱化母音は弱い位置にあるので、その結果、ロシア語でもブルガリア語でも現在の дни の形になったのである。同様にして、次の諸語の成り立ちを説明することができる。стáрец — старци, прозóрец — прозорци, малък — малки, тесен — тесни, бавен — бавна などである。出没母音 e と ѿ 以外に現代ブルガリア語には挿入音の e と ѿ とがあり、全てゼロ音で交替する音である。音節の上昇反響音の法則の影響と関連する強い交替である。これは多分、ロシア語でより厳格にブルガリア語で保守されている。ブルガリア語では鳴子音と母音間ではしゅう子音は現れず、鳴子音としゅう子音は挿入母音で区切られる。これは史的な根拠からではない。péсен (песни ではない), в этър (ветровé ではない), мísъл (мисли ではない), теáтър, лítър, социализъм 等である。引用例からも明らかのように、挿入母音と出没母音は、普通、語尾に現れる。

2. 4. 名詞の数の対立の表現の特別な場合

既に指摘したように数の文法範疇の基礎には単数の複数に対する規則的な対立がある。複数は概念の分解を示し、単数はそのような指示を含まない。ブ. маса—маси, човек—хора ほか。しかしある名詞ではその意味から、単数、複

数いづれかの形しか持たない。

まずブルガリア語では他のスラヴ語でと同様、抽象的な意味を持つ名詞は複数形を形成しない。これに入るるものとして、性質、行為、状態、物質などの名称があげられる。 старост, вървеж, глад, добро, жел язо, въздух, калなど。さらに単数に限られるのは多くの集合名詞 (студентство, работничествоほか) と国、町、山、川などの固有名詞 (България, Плевен, Витоша, Дунавなど) である。同時に固有名詞は必要ある場合は複数形を形成する。 Радка — Радки, Иван — Ивáновци, Стоянов — Сто янови (最後の形はストヤノフの同姓を意味するだけでなく、ストヤノフ家を意味する。) -оに終わる名詞や語尾のない名詞の複数化の場合に使われる同じ -овци と言う接辞 (Ивановци, Пенчовци; Гри́мовци グリム兄弟) は歴史上などの人物名の通性名詞化した名詞として固有名詞を翻訳する場合役に立つ。 бай Гáню (ア. コンスタンチノフの同名の中編小説の広く知られた登場人物である) — байганювци, Гаврош — гаврошов-ци, Дон-Кихот — донкихотовци, Наполеон — наполео-новци.

複数形のみを持つ名詞 (ラテン語で pluralia tantum と名付けられている) は普通二つの部分からなるか、あるいは全く同じ量、嵩を持った物質の塊を意味する。 клещи, очила, окови, везní 、 гáщи 、 въглища 、 книжá 。抽象的集合名詞も単数形がない。 устои, недра, избори

概して複数形だけを有する名詞の範疇はロシア語ほど、ブルガリア語では顕著ではない。多くのロシア語の pluralia tantum に相当するのはブルガリア語では二つの数字の相關的な形を持つ名詞で表現される。例えば、ブルガリア語でロシア語の часы にあたる单語は часóвник と呼ばれ、ロ. счеты — ブ. сметáло, ロ. грабли — ブ. греблó, ロ. носилки — ブ. носíлка, ロ. волосы — ブ. коса となる。(同じ意味で косý も見受けられるが、ロシア語の影響で可能であるというほどのものである。) さらにより特徴的なことは、ブルガリア語の若干の名詞は pluralia tantum の範疇から普通の名詞の部類に移行しているということである。例えば ножици はさみ、の形と並んで、 ножица の形が現れ、 панталони ズボン、と言う形と並んで панталон と言う形も使われる。 врата と уста の形は单数女性名詞と再解釈される。(同音異義語のロシ

ア語の pluralia tantum を比較されたい。)

若干の他のものと同様、これらすべての現象、つまり借用名詞を数詞の活用に巻き込んだり、語の形態変化の一項を異なる語の変化形で補充することがあまりなかったということは、ブルガリア語のこの文法範疇がより大きな体系性、系統性をもち、ブルガリア語の形態表現が最大限、規則的であるという傾向が存在することを示すものであろう。

2. 5. 名詞限定の範疇 — 名詞定型の形成・後置詞の機能 —

現代ブルガリア語の最も顕著な特徴の一つは、西ヨーロッパ諸語、英語、ドイツ語、フランス語などに存在するものと類似の、名詞の定性の範疇の存在である。これはすなわち、ブルガリア語では特別な文法形式・後置詞の機能により所与の名詞が意味する対象が言語行為に参加する人に取り既知のことと考えられることを指示することができる。(就中、それが彼らの眼前にあるかまたは

後置詞のつかない場合	Чета книга.	Чета коя да е книга.
個別的修飾	Чета книгата.	Чета конкретна книга, например романа "Под игото" от Иван Вазов.
数量的修飾	Студенти от първа група отиват на екскурзия. <i>неопределено</i>)	Не всички студенти отиват на екскурзия (группата е например от 15 души, а отиват само 6 души).
	Студентите от първа група отиват на екскурзия.	Всички студенти отиват на екскурзия.
一般的修飾	Дървото е растение.	Членуваната дума означава видово понятие, а нечленуваната - родово понятие.

それが一般にとてもユニークであるなどで) 例えば、文、Едно момиче пие мл яко、で牛乳を飲んでいる我々に不明の女の子のことが言及されているが、すなわち、牛乳を飲んでいるのが、女の子だということは重要でない。しかし、

文 Моми́чето пíе мл эко または Мл эко-то е мнóго вку́сно では、話者・聴取者共にその女の子と牛乳は完全に既知の存在なのである。すでにそれに言及されており、既知の女の子、牛乳なのである。この後置詞は、個別化を図る機能以外にも、別の機能も果たすことができる。それは一般化と普遍化である。この場合名詞はあらゆるクラスの同種対象を意味する。例えば、話が次のような Мл экото е полéзно (牛乳はよい) という一般的性質について及ぶのか、Орéльт е пти́ца (鶯は鳥である、つまりすべての鶯は鳥である。) という類の普遍性について伝達する場合である。

名詞後置詞の文法性の判別

	男性	女性	中性
单数	-ът, -а		
	-ят, -я	-та	-то
复数		-те	-та

結合形式は現代ブルガリア語では、単語に後接される。それは音韻的（韻律的）単語との一体物を成し、現代正書法の諸法則によって融合して、書かれる。ロシア語会話体でも сын-от, корова-та, окно-тоなどのタイプの定形化され、具体化された意味をもつ後置小詞が拡大しているが、しかしロシア語固有の使用法ではなく、それらは臨時的な用法である。

定性という文法上の意味の表現手段である冠詞は、ブルガリア語では、後置詞と呼ばれる指示詞で、古代の指示代名詞 ТЪ, TA, TO にさかのぼる。以前の代名詞と名詞の

女性名詞の後置詞

单数		复数	
Нечленувани форми	Членувани форми	Нечленувани форми	Членувани форми
ябълка	ябълката	ябълки	ябълките
жена	жената	жени	жените
крепост	крепостта	крепости	крепостите
пролет	пролетта	пролети	пролетите
любов	любовта		

女性名詞ではブルガリア語の後置形は -та である。 маса — масата, хартия — хартията, радост — радостта, песен — песента。 (子音に終わる女性名

詞の後置詞のアクセントは後置詞に移る。)

中性名詞の後置詞

单 数		複 数	
Нечленувани форми	Членувани форми	Нечленувани форми	Членувани форми
село	селото	села	селата
момиче	момичето	момичета	момичетата
око	окото	очи	очите

中性名詞は少なくとも首尾一貫し、後置詞の -то を後置形とする。 момче — момчето, огледало — огледалото, училище 学校 — училището, такси — таксито。

男性名詞の後置形は長形と短形の 2 種類ある。完全形は後置形 -ът をつぎのように名詞共通形に後接する。 отговор — отговорът, стол — стольт, мъж — мъжът。後置形の短形は [ъ] を後接して形成される。それは文字化する際に、常に -а として伝えられる。 отговора [отговоръ], стола [столь], мъжа [мъжъ]。もし語幹が以前軟子音であったものが、硬化して、硬子音で終わると後置形を形成する場合にこの歴史的な軟化が再興され、この場合、正書法では後置形は -ят または -я の形をとる。これが接辞 -тел, -ар に終わる名詞や ден, кон, път などの単語に適用される。учител — учителят, учителя, кон — конят, коня。[j] で終わる語幹を持つ名詞も書く場合に同じ形をとる。музей — музеят, музея。完全後置形は、名詞が文中で主語を勤めるか、名詞述語の名詞部分を勤める場合に用いられる。Пътят е лош. Това е пътят。残りのすべての統語環境では名詞の後置形は短形で現れる。Не виждам пътя. По пътя н ъма нищо интересно.しかし男性名詞のこの後置形の区別は標準の文語形でのみ守られている。会話体ではこの区別は守られていない。

この接辞（定形・後置詞形）に関する形態論的扱い方はかなり複雑である。

男性名詞の後置詞

单 数		複 数		
無後置詞形	後置詞形		無後置詞形	後置詞形
	後置詞長形	後置詞短形		
продавач	продавачът	продавача	продавачи	продавачите
	[продавач-ъ]			
учител	учителят	учителя	учители	учителите
	[учител'-ът]	[учител'-ъ]		
секретар	секретарят	секретаря	секретари	секретарите
	[секретар'-ът]	[секретар'-ъ]		
ден	деньят	дня	дни	дните
	[ден'-ът]	[ден'-ъ]		
герои	героят	героя	герои	героите
	[герой-ът]	[герой-ъ]		
град	градът	града	градове	градовете
	[град-ът]	[град-ъ]		
идеализъм	идеализъмът	идеализма		
		[идеал йэмъ]		
крак	кракът	крака	крака	краката
		[кракъ]		
брат	братът	брата	брата	братята
	[брат-ъ]			
баша	башата		бashi	башите
дядо	дядото		дядовци	дядовците
аташе	аташето		аташета	аташетата

多くの研究者がまちまちに自らの解釈を提案している。これを小詞と見なすのはエル. アンドレイчинであり、語尾と見なすのは、ユ. エス. マースロフ、さらにエフ. スラーフスキイは接辞、ゲ. アロンソンは前接語だと考えている。明らかなことは文法機能の観点から見るとブルガリア語の後置形は語形変化の接辞であるが、それが後に置かれることを考慮すると語尾である。しかしこの語尾は自由にふるまう。殊にこれから検討するように、これには一定の活動性がある。のみならず、それは、既に準備された形に接合され、まさにそれをしてブルガリア語が膠着性をもつといわしめている。例が特徴的なのでなおさら、この言語が母音調和の要素をも提示したり、膠着接辞のある言語の普通のタイプの要素を提示する。ところが実際は単数形で、後置形の母音が語尾の母

音の役をつとめていることを指摘できる。例えば、幾らかの -o に終わる男性名詞は後置形 -то をとる。дядо — дядото, 一方 -a に終わる名詞は -та の後置形になることがある。баша — башата。しかし、最も明快なのは複数では母音が使われるということである。この場合単純な法則が機能する。名詞複数形が -a に終わる場合、その名詞の性の如何に関わらず、後置形 -та をとる。крака — краката, братя — братята, сърца — сърцата, пътища — пътищата, хора — хората。もし複数形が -и または -e をとる場合、同じく名詞の性の如何に関わらず、後置形 -те をとる。ножове — ножовете, речници — речниците, очи — очите, рамене — раменете, ръце — ръцете, гори — горите。

2. 6. 子音 p と л の母音 ъとの結合

ブルガリア語で非常にしばしば見られる音韻結合に流鳴子音 p, л と母音 ъとの結合である。その際、同じ語幹で、その結合が ръ, лъ, になったり、ър, ъл, などとなったりする場合がある。次例を参照しなさい。връх 頂上 — върховé, гръб せなか — гърбът, кръв 血液 — кървав 血の, мълчá 沈黙する — мълчáなどである。これらの音韻交替は弱化された母音と音節形成の流音の相互作用の複雑な歴史を反映している。現代ブルガリア語のこの件の共通則は以下の通りである。もし結合後の次の子音が同じ音節にある場合、流音は母音に先行し結合は ръ, のタイプとなる。もし最後の子音が他の音節を始めるなら、結合は ър ъл の形になる。(上掲の例を参照のこと。) しかしこの一般則には少なからず例外がある。この音韻交替 ръ/ър はむしろ歴史的な経緯として説明される。

2. 7. 名詞呼格形

ブルガリア語の名詞は、それによって話者が人物や対象に呼びかけ、注目する特殊な呼格形を持っている。И ти си в мене, ти, родино моя! (П. Яворов) 「そしてあなた、あなたは私の思い出の郷里である。」 «Евтиме, ти става ли нощес?» — запита тя неуверено (П. Вежинов) 「エフティーミよ、あなたは一晩中起きていたのか。」と彼女は質した。呼格は古代からの名詞の語形屈折の

財産の残滓の一つである。名詞が格の諸形のシステムを完成させた共通スラヴ語の時期以降も、多かれ少なかれこのシステムを維持した。呼格を維持した現代スラヴ諸語にとつても、この呼びかけの形は仮に「呼格」として認められる。呼びかけの形は通常の格のように文中での名詞の統語役割を意味するものではなく、むしろ、それは当該名詞形が文の文法構造の境外にあることを示すものである。名詞の活用の呼びかけの形のこの独自性は、この形が格システムの一般的崩壊の際にも維持されたという、ブルガリア語の資料でも、さらにこれとは反対に、格活用は全般に安定搖るぎないが、呼格形は姿を消した、ロシア語の事実によつても立証される。現代ロシア語では *боже* (от бог) または *отче* (от отец) などの呼びかけの形の個々の残存物の例が維持されているが、加えてロシア語に昔からあるこれらの語の意味機能が失われ、再解釈されている。

固有名詞の呼格形

男性形		女性形	
一般形	呼格形	一般形	呼格形
Иван	Иване	Иванка	Иванке
Петър	Петре	леля	лельо
господин	господине	госпожа	госпожко
приятел	приятело	госпожица	госпожице
син	сине	дъщеря	дъще
човек	човече	майка	майко
отец	отче	мама	мамо
мъж	мъжо	жена	жено

現代ブルガリア語では呼びかけの形は語形成とその利用法において極めて制限的である。例えば、それは中性名詞、男性名詞の一部と抽象的な意味の名詞からは生成されない。すべての名詞で、それは複数形とは両立しない。この形の利用の範囲はますます狭まっていると考えられる。だからといって、特殊な呼びかけの形の利用はある一連のケースでは義務的である。まず、個人と男・女民族名を意味する人物に呼びかける場合である。(名字には、呼格は形成されないが、名詞に付加結合されると、その時だけ、ある語が呼格形を得ることがある。 *другарко директорка*。

呼格形の語尾は -e または -o である。語尾 -e は呼びかけに指小・愛称のニュアンスを与え、語尾 -o はその意味合いがない。のみならず、これら語尾の分布は単語の語幹の形態音韻の特質に依存している。доктор — докторе, Иван — Иване, син — сине, народ — народе, българин — българино, работник — работнико, майка — майко, жена — жено, другарка — другарко, родина — родино, земя — земъо, Иванка — Иванке。その語幹の最終子音が今日硬音になった、若干の男性名詞は（しかし歴史的な軟音は硬置形を形成するときに表面にでてくるが、）正書法では -ю として伝えられる語尾 [y] によって呼びかけの形をつくる。例： другар — другарю, учител — учителю。変化語尾 -e の前で、語幹の後舌歯擦子音は口蓋化する。юнак — юначе, княз — княже などである。

2. 8. 名詞の格変化の残滓

共通スラヴ語の時代に名詞が保持していた豊富な格変化のなかで、現代ブルガリア語は名詞の基本形と特殊な呼格以外に、斜格の個々の残りの痕跡も維持されている。実際には話は次の二つの格、対格と与格とに関わる。（主として固有名詞の）男性名詞の若干の名詞のうち -a に終わる対格形は直接目的語の機能で用いられ、さらに、前置詞と結合されて多様な斜格の補語、状況語、不一致定語を表すために用いられる。Ела да идем в манастира при дякона Викентия (И. Вазов) 修道院の司祭、ヴィケンティイの元へ行こう、； Като си представи човек Ботева в този вид, неволно си припомня знаменития руски революционер — Желябова,— който нанесе един най-тежък удар на руския деспотизъм с цареубийство и умря също тъй за своите убеждения (Д. Благоев). Петима Петка не чакат (Поговорка)。現代ブルガリア語にとって名詞の対格形は文体上次のような制約がある。それらは過去一世紀の作家や民謡、昔話、決まり文句、成句、俚諺の様な民話のソースにのみ見られる。そしてこの話し言葉には、これらの形が生き生きとした姿で保存されている。全般的に、概して文語の現代的基準では、представям Ботева ではなくて представям Ботев、при дякона Викентия ではなくて ида при дякон

Викентий、Петкаではなくて чакам Петкоなどである。

さらに（男性名詞で -y に終わり、女性名詞で -и に終わる）与格形は現代語ではより古風である。しかしそれは若干の作家や民間伝承の原文で、安定した表現の中で残りの現象として見られる。Старци се молят богу горещо (Х. Ботев); Гарван гарвану око не вади (Поговорка) 人は相身互い; Mama Стоян думаше (民話) 母はストヤンに言った。現代語の基準はこの様な状況に次のような統語関係の分析的表現を規定している。Mama на Стоян думаше など。

ブルガリア語や名詞の若干の副詞や前置詞の中にも多様な格の形の痕跡を探し出すことができる。горе, долу, в къщи, тичешком, чудом, по старому, снощи, посредством, върху ほか。しかし、もちろんそこでは格の形は語源を知つてのみ明らかになる。

2. 9. 名詞の無主語的結合

格の喪失で現れた名詞の活用のシステムの縮小はブルガリア語文法での前置詞の役割を高めることとなった。しかし前置詞の統語的可能性は無限ではなく（すでにそれらの間の機能に関する内容の再分配や新しい補助語の創造に関連しては言及した。）そこで語順が補足的に一定の統語機能を負うのはやむを得ないところである。就中、現代ブルガリア語では名詞 + 名詞 からなる構文が盛んに用いられている。そこでは名詞同士の文法関係が緊密な関係の配置のよつてのみ表現される。こうした名詞の前置詞を用いない結合形式は幾らかのタイプに分類される。

1. 同格の結合。名詞の一つは他に対して（付加文、同格語）補語である。майка-зе-мя, град-герой, министър-председател 首相、колега отличник, сестра посетителка, отдел кадри（ブルガリア語の正書法はこの様な状況ではハイフンと、分割記述という若干の混同を認めている。）この様な語結合の名詞は性と数が一致するのが一般的である。それらは、二要素よりもより長くつながれて（инструктор майстор готвач）いるが、自らの構成素に一致定語、形容詞を参加させることがある。стоки най-хубаво качество 高品質の商

品、 категория деятелен залог 能動相の範疇、など。現代ブルガリア語では同格語結合は、そのうちにそれらの多くで、一つの複合語へ融合する傾向が現れるのと同じく、広く普及しているとういことはすでに述べた。一語に融合することについては、結合は次のように形式的一体性を志向する。その構成要素の進行の順序が揺るぎないものになり、アクセントが一ヵ所に固定され、語の活用の方法は構成要素の一つにのみ維持される。ところが意味のレベルでは複合語に一つの概念が対応しているが、まれにこの様にして語彙化された結合のどの部分が被限定部分で、どの部分が修飾部分か確立するのが困難なことがある。 *дар-СЛОВО, министър-председател, бисер-сълзи, тонкилометър* トンキロ（輸送の単位）ほかである。

2. -не に終わる目的語結合：直接他動詞から接尾辞と語尾が一致している接辞-*не* によって形成される名詞はそれから派生したと考える動詞の統語特徴、直接補語の支配の方法を維持する。本来の、動詞の活用にそれらの形式を組み入れる。以下に、この様な前置詞のない結合を例示しよう。 *прибиране реколтата* 作物の取り入れ、*нарушаване единството, откриване десетдневката* 旬間の開幕、*заглушаване шума, писане писма*。このタイプの前置詞なしの語結合特徴は次の二つにまとめられる。第一は、被修飾名詞はここでは普通限定され、動詞の支配を受けた形で用いられる。第二はこれらの結合の最初の主要要素の役割にすなわち支配語の -*на* で終わる名詞が立つ。出動詞名詞は従来の自らのこの様な統語的な使用を維持することが特徴的である。

3. 量を表す結合：この場合、名詞の一つは（先頭の）量と長さ、面積、規模、嵩を持った物質の固まりの規模を意味し、第二番目は任意の計算か測量の対象を意味する。そのうえ、分量は、ここでは、正確でなく、偶然であるか隠喩的でありうる。しかしこれは語結合の量の本質を変えるものではない。*метър разстояние, чаша вода, редица предприятия* 一連の企業、*стена книги, стил песни, дъжд монети, носна кърпичка земя* ハンカチほどの土地。テクストで、このタイプの名詞語結合は成功裏に前置詞なしの構文と競争している。何らかの程度で意味に関して無前置詞結合と近いといえる。*чаша с вода* 水の入ったコップ、*дъжд от монети* コインの雨。無前置詞結合の第二構成素は測

量可能性、可算性の潜在的可能性を含んでいる。こうした分解の理念は複数名詞や集合名詞の存在根拠を見いだす。

現代ブルガリア語の無前置詞名詞語結合のあらゆる多様性は記述された三つのタイプでつくるものではない。「分析的な傾向」という文法態勢の確立によって刺激されたこの種のタイプは自らの影響の範囲を広げ続けて新語彙素を生み出し、空間、時間間隔が表現され、あるいはシステム内的構造を派生させる。特に定期刊行物から採取された次例を参照されたい。*изгрев слънце* 日の出、*началник склад*, *музеят Ленин* レーニン博物館、*кроеж палто* 外灯の裁ち方、*рисунка автор* 著者のデッサン。この様な表現のすべてが標準文法として認められているわけではないが、全体としてそれらがブルガリア語統語論の発展の現実の表象の極めて重要な断片を形作っていることを認めないわけにはいかない。

III ブルガリア語の形容詞

3. 1. 形容詞の性

名詞が動物・人間などの活動体を意味する場合に形容詞や物主代名詞、定代名詞、その他の代名詞もまた性カテゴリーを付与され、文法的な内的意味に基づき文法的一致機能を働かせる。つまり形容詞は自らに固有な性を具有するのではなく、修飾する名詞の要求に依存するにすぎない。(別言すれば、形容詞の性は何かを分類するために存在するのではなく、文法活用の成立を容易にするために存在するのである。) さて、辞書に登録される形容詞の見出し語としての形は男性单数形である。このブルガリアでの伝統は単に基準として続けられているのではなしに、もともと、形容詞男性形は語幹のみからなるゼロ語尾形だからという語学的要請によってである。例を見てみよう。*хубав*, *голям*, *син*。時として、形容詞は次のように -и の語尾で男性形を形成することがある。例えば *български* などである。次に女性形であるが、これは語尾が -а または正書法的には -я, -я に終わり中性形は語尾が -о (大変まれに -е) で終わる。以上を分かりやすく整理すると以下のように纏められる。

ブルガリア語の形容詞

男性形	女性形	中性形	複数形
добър	добра	добро	добри
лош	лоша	лошо	лоши
летен	лятна	лятно	летни
овчи	овча	овче	овчи
вълчи	вълча	вълче	вълчи
български	българска	българско	български

ブルガリア語ではロシア語で顕著な形容詞の形態論的下位範疇である長語尾形・单語尾形の区別は存在しない。したがって、单一形で修飾するべき対象の普遍性や定時性を表現し、勿論、述語・定語用法で意味内容を表示し分けることになる。例えば次の様にである。 *млад човек* 成年と *Той е млад* 彼は若々しい、である。*хубаво село* 美しい村。 *Това село е хубаво* この村は美しい。形容詞の中性形は形式的に然るべき副詞としても機能する。(とはいえその統語機能は勿論多様ではあるが。) 次例を比較しなさい。*хубаво село* 美しい村。*Тя рисува хубаво* 彼女は綺麗に描く。

ブルガリア語の形容詞(2)

男性形	女性形	中性形	複数形
мъртъв	мъртва	мъртво	мъртви
близък	близка	близко	близки
топъл	топла	топло	топли
добър	добра	добро	добри
далечен	далечна	далечно	далечни
двоен	двойна	двойно	двойни
червен	червена	червено	червени
син	синя	синьо	сини

複数形容詞は語尾 *-и* をもち、单語中でアクセントの移動はない。例：*хубав* — *хубави*, *скъп* — *скъпи*, *широк* — *широки*, *български* — *български*。特徴的なことは、すべての外来語はブルガリア語では規則的に数の概念を持つ。*палто* — *палтá*, *кино* 映画館 — *кинá*, *такси* — *таксítа*, *меню* — *мен юта*。

また同時に一般的に性と数の形のないトルコ語から借用された、幾らかの形容詞がある。例：сербéз — 勇ましい сербез мъж, сербез жена, сербез момче。

3. 2. 形容詞の定形の形成

発話での後置詞の利用はブルガリア語習得を積極的に進めるには最も複雑な問題の一つである。名詞の定形を利用する際にまた、定形の付かない一般名詞を利用する際に指し示せる解決ずみの確実な法則は存在しない。実践的にみれば、これは発話の現場では後置詞の名詞への接続は多く義務的であったりまた、反対に任意的でもある、ということである。理論的にみるとこれは、定体の範疇が推定的性質を持つということを意味する。ブルガリア語の教科書は定形の利用を定形の2つの基本的機能（個別化と一般化）一再ならず文脈の統語・意味論的特質に留意することを勧め、定形の利用の仕方には実践してみて初めて慣れるものであると結論しているほどである。それは実際その通りである。それと共に、ブルガリア語の定形利用に影響を及ぼす若干の一般則を明らかにすることができる。

何よりまず、一定の後置は発話の現実分析の表現手段であり、この現実分析とは文を文意伝達の関係の不均等な2つの部分、つまり旧情報（聞き手に既に知られている情報）と新情報（そのことのために話者が説明を新たに加える情報）に分割することである。ロシア語では、この分割を表示するために語順とイントネーションが役立っている。ブルガリア語では（普通文のより大きい部分をなす）旧情報を創出するために既定詞も加わる。新情報の役をする名詞にとってより典型的なのは既定辞の付されていない共通形である。На сцénата ви́ждам едно́ момиче. Момичето чете́ стихотворéние. Стихотворението е много хубаво.

そこから、限定形の利用でより広く限定された法則が流れ出る。例えば、ロシア語で一番標準的語順で普通旧情報（テーマとも言う）にとられるのは主語であるので、これは、自らの性質に関し次の様なあり得べき法則を立てるということを可能にする。ブルガリア語の主語は定義されない形でより、定義された形で現れる。もちろん、話がこれから進められる何かの原因についてなので、

主語が定形を単に得られない場合はこの限りではない。補語にはこのようなことは観察されない。

形容詞原形	形容詞後置形			
	男性後置形	女性後置形	中性後置形	複数後置形
млад, -а,-о,-и	младият	младата	младото	младите
добър, -а,-о,-и	добрият	добрата	доброто	добрите
далечен,-а,-о,-и	далечният	далечната	далечното	далечните
двоен,-а, -о, -и	двойният	двойната	двойното	двойните
вълчи, -а, -е,	вълчият	вълчата	вълчето	вълчите
студентски, -а, -о, -и	студентският	студентската	студентското	студентските

他方、補語の機能を担う名詞は状況語や不一致定語の役の場合よりしばしば定形になる。(多分これは、状況語や不一致定語の名詞の場合、自らの特殊な機能を喪失して、統語的に二次的な異質な役割を担っているという理由による。)それで、 от страх, от радост, с удоволствие, без палто, без край 無限に, по риза シャツを着て, на кино 映画へ, на театр 劇場へ, по желание, по служба, от дървó 木で, за работа 仕事のため、などのタイプの前置詞名詞語結合は、月名、週名、国名などに定形がつけられないように、普通、定形が使われないのである。

合成名詞の名詞部分として機能する名詞は多くの場合、定形化されない。普通無人称構文で使われる動詞 имам と нямам で合成述語部分を担う名詞も、基本的に、新情報を伝えるので、定形化されない。Имаш ли време?; В чантата има книги; В града няма тролей; Няма смисъл; Няма нужда 必要がない。

定形は固有名詞から生成されない(呼び名、あだ名を除く)。自らに付け足して固有名詞になっている普通名詞にも定形はつけられない。вестник "Труд", професор Иванчев, площад "9 септември"。ある統語環境では親族名の名詞に定形はつけられない。майка, баща, жена と брат などである。これらの

名詞は多少なりとも次の様に平明に説明することができる。ここでは上掲の対象や人物は完全に定義されていない。同じ理由で、限定として、自分の中に代名詞 този, онзи, всéки 「個々の」を持つ名詞は後置詞が付かない。

就中、名詞文で一致定語がある場合、限定は直に名詞につけられるのではなく、その一致定語に付けられる。もし定語がいくつかある場合、それらの最初の部分に付けられる。(つまり、特に言及すれば、名詞連語の最初の重要語に附加される。) чанта — чантата と кожена чанта — кожената чанта さらに голямата кожена чанта, новата голяма кожена чанта など。¹

女性名詞を修飾する形容詞に後置形 -та (новата чанта, тихата вечер) が、中性形容詞に -то (родното село) が付加される。約言すると、あたかも限定辞が単に引かれて名詞そのものよりその限定物に移っている。本質的に男性形でも形容詞は名詞から移動した限定辞 [ът] か [ъ] を加える。しかしこの時形容詞は自らの歴史的完全 (または代名詞の) 形を再興するので、全体として文語の限定辞は -ият のタイプ、または -ия のタイプを得る。хубав — хубавият, голям — големият, тесен — тесният。

形容詞の限定形の長語尾・短語尾の差異は以下のような限定されうる名詞の統語機能の既に言及された対立に近づいた。もしこの名詞が文中で主語の位置あるいは述語の名詞構成部分を占めるならば、その修飾は長語尾の限定辞でなされる。そしてこれ以外の場合では、修飾辞の短語尾形が使われる。次例を参照しなさい。Обичаш ли зелéния цвят? Зеленият цвят е полéзен за очите.

3. 3. 形容詞・副詞の比較級

ロシア語、白ロシア語、ウクライナ語でと同様、ブルガリア語では性質形容詞と関係形容詞が区別される。性質形容詞は比較級という文法範疇を所有する。(これはブルガリア語では基本的形式的特徴であるが、それはロシア語の性質形容詞では、特徴的な長語尾・短語尾の対立がブルガリア語に存在しないこと

¹もし現代ブルガリア語で形容詞の代名詞形の痕跡だけが持ち出されるなら、ロシア語では、知られているように、それは、この品詞に基本的、代表的である。высок-ий, зелен-ый, нов-ый など。

による。) 比較の程度は三種類ある。

形容詞比較級・最上級

原級	比較級	最上級
хубав	по-хубав	най-хубав
добър	по-добър	най-добър
близък	по-близък	най-близък

副詞の比較級・最上級

原級	比較級	最上級
хубаво	по-хубаво	най-хубаво
добре	по-добре	най-добре
близо (близко)	по-близо (по-близко)	най-близо (най-близко)

優等比較は意味・形式両面で出発点である。それは нов, хубав, бял, евтинなどのタイプの例で馴染みがある。比較級は接頭辞 по- を原形に接続して形成される。この接頭辞は独自のアクセントが維持され、ハイフンを付して書かれる。по-нов, по-хубав。比較の対象は前置詞 от で表される。Той е по-млад от мене. Тази улица е по-дълга от онази。最上比較は接頭辞 най- で形成される。同じようにハイフンを付して書かれる。(ところで全てこの形は二重のアクセントを得る。) най-хубав, най-евтин。性質の最上はそれと同類の物の中からある物を分離するのであるから、この形をとる形容詞はしばしば限定辞が付けられる。もしその後が主語を修飾するなら、) Най-големите градове в България са София, Пловдив, Варна, Русе, Бургас。

同様にして性質副詞の比較級が得られる。дълго — по-дълго, най-дълго; бързо — по-бързо, най-бързо。比較級の形成の補充的方法 (ロ. хороший — лучший, плохо — хуже, много — больше) はブルガリア語ではほとんど見られない。ただ例外がある。副詞 много — повече より多く — най-много 最も多く。全般的に、現代ブルガリア語の所与の文法範疇特性の中で概して次の二つを分離できる。始めに形容詞・副詞の比較級・最上級の諸形は規則的な、画一性で形成される。厳密に接頭辞を用いた方法で(丁度その時にロシア語で

は同類の接頭辞、前綴が同義の接辞の、さらに、補助語と比較の補充的語形成表現が競い合いをしている。)。

次にブルガリア語の特徴となるのは、比較級や最上級の接頭辞は単に形容詞や副詞に接合するばかりでなく、もっと広汎に他の品詞へも波及、利用されることである。次例を参照しなさい。 За тия rábo-ти той е най-мáйстор こういう仕事に彼はより良い仕事人です。; Дългата рокля по отговаря на тържествения момент 長い服は（この）式典の時にマッチしている。; Az по обичам да работя в къщи 私はもっと家で働くのが好きです。明らかにこういう場合に、名詞、動詞や他の品詞の固有な比較表現と衝突する。これらの形式のができる条件によって言葉の中に潜在的な、評価の、性質の意味があることもある。従って больше любить と меньше любить は可能であるが、 больше писать と меньше писать は不可能である。

3. 4. 一致・不一致定語

文要素としての定語は次の二種類である。一致定語と不一致定語である。（これは、既に言及の通りブルガリア語文法では個々のタイプに分類できる同格語とは認めない。）最初の場合には定語は形容詞、形動詞、順序数詞によって表現され、さらにそれらに変わる代名詞も同様である。すべてそれらは修飾される名詞と性、数で一致する。синьо небе, изминат път 通ってきた道、първи курс, такива хора。第二の場合には定語は前置詞のついた名詞（учител по биология, път без край, кукла от дърво）、物主的意味の人称代名詞与格短形（стаята му, брат ти, опитите си）、前置詞のある人称代名詞完全形（цветя за нея）副詞（стаята долу）と活用しない形容詞（сербез момче）によって表現される。

全般的に、これはロシア語、ウクライナ語、白ロシア語でそれによって定語が表現される同じ語彙文法範疇である。ユニークな相違点はこのリストに斜格形名詞、かなり特徴的な文の当該要素の表現方法、例えばロシア語で（стрелка часов, взгляд материほか）は、存在しないことである。現代ブルガリア語でそれに相当するのは次の様な前置詞のついた名詞（стрелка на часовника,

пóглед на майката)であることは言うまでもない。スラヴ諸語の文法システムの一定の独自性を挙げられた方法の内的相互関係で観察することができる。例えば、不一致定語の役割の与格前接語は東スラヴ諸語に見いだせないブルガリア語に固有の現象である。他方、名詞により表現される不一致定語は全般的に、ロシア語で許されるよりもより少ない頻度でブルガリア語に特徴付けられる。これは関係形容詞の形成のより大きい自由度と関わっている。次のブルガリア語の語結合とそれらのロシア語訳を参照されたい。годишно време — время года, зрелостно свидетелство — аттестат зрелости, гледна точка — точка зрения, почивна станция — дом отдыха, рожден ден — день рождения. これと反対の現象も似られるが（例えば、чека за зъби — зубная щетка）それらはつい今しがた記述されたタイプの対応より著しく頻度が低い。

ロシア語でもブルガリア語でも同じ名詞が文中で同時に一致定語、不一致定語を持つことがある。Да бъде крепка, братя, десницата ви свята! (X. Смирненски)。

IV ロシア語の名詞

4. 1. 名詞概観

名詞は独自の性、数、格の範疇で表現される対象を意味する品詞である。この対象という概念の範疇に入るのは、具体的な対象（窓、山、櫈）、生物（息子、ウサギ）、物質（砂糖、金）、事実、事件、現象（火事、雨、改革）、特徴、行為、持ち主から引き離された状態（死去、ランニング、夢）などである。

単数名詞には男性、女性、中性の文法性（дуб, волна, поле）があり、少数のグループは通性（сирота, умница）に属する。複数でのみ用いられる名詞に文法性が存在しないもの（ножницы, ворота）がある。名詞には、短・複両数で用いられるもの（дом — дома, медведь — медведи）と、短・複何れかの数でしか用いられないもの（конница, молоко: хлопоты）とが存在する。名詞には格活用がある。（例外として同音異義を持つ無活用名詞がある。пальто, кенгру）名詞の性・数・格は他の品詞とは独立に定義される。

男性活動体名詞の活用

主.	<i>мальчик-ф</i>	<i>учёный</i>	<i>Карамзин-ф</i>
生.	<i>мальчика</i>	<i>учёного</i>	<i>Карамзина</i>
与.	<i>мальчику</i>	<i>учёному</i>	<i>Карамзину</i>
対.	<i>мальчика</i>	<i>учёного</i>	<i>Карамзина</i>
造.	<i>мальчиком</i>	<i>учёным</i>	<i>Карамзиным</i>
前.	(o) <i>мальчике</i>	(o) <i>учёном</i>	(o) <i>Карамзине</i>

名詞は語形成の特質を持っている。(特に名詞は専門の接尾辞を持つ。-тель, -ость, -ств(о) ほかである。また単語の集合体の縮約形を持つ。 ООН, СИА, местком など。

文中で名詞はまず主語・補語として現れる。**Водитель** завел **мотор** (К. Симонов); しかし述語の名詞部分の機能を遂行することができる。Система — это дальнобойное **оружие**, это **линза**, собирающая воедино лучи (Д. Гранин); 不一致定語としても機能する。 Рыжие берега тянулись за окнами **каюты** (К. Паустовский); また状況語として現れる。 С **наплавов** артель вернулась в **полдень** (В. Астафьев). 名詞はまた一致定語を獲得する能力を持っている。 Царственные **кроны** уходили на сорокаметровую **высоту** в небо, а под пологом неба стояла первозданная **тишина** (В. Чивилихин).

時に、特別な特徴で異なっている次の単語のグループが名詞と関係を持っている。これは無人称文の主要素の機能を担う время, лень, недосугなどのタイプの述部か、文の導入語の機能に用いられる правда, словом, к сожалениюなどのタイプの語彙である。伝統的な理解によれば、最初のグループの語彙は状態（副詞）の範疇の語彙に属しており、第二グループの語彙は叙想を表す特別の部類である。

4. 2. 名詞の語彙文法範疇

名詞は、それらに加わっている単語の意味と形態的（語形成の）特徴に応じ

て確立された範疇に分かれている。それらは固有名詞、普通名詞、集合名詞、物質名詞、具体名詞、抽象名詞、活動体名詞、不活動体名詞である。これらの範疇は部分的に交差している。例えば、普通名詞は具象名詞でも抽象名詞でもある。(дерево, движение) また、活動体名詞でも不活動体名詞もある。(юноша, молоток) などである。

活動体名詞を修飾する形容詞男性形の活用

主.	<i>дежурный</i>	<i>больной</i>	<i>лесничий</i>	<i>Скляревский</i>
生.	<i>дежурного</i>	<i>больного</i>	<i>лесничего</i>	<i>Скляревского</i>
与.	<i>дежурному</i>	<i>больному</i>	<i>лесничему</i>	<i>Скляревскому</i>
対.	<i>дежурного</i>	<i>больного</i>	<i>лесничего</i>	<i>Скляревского</i>
造.	<i>дежурным</i>	<i>больным</i>	<i>лесничим</i>	<i>Скляревским</i>
前.	(o) <i>дежурном</i>	(o) <i>больном</i>	(o) <i>лесничем</i>	(o) <i>Скляревском</i>

形容詞男性形から作られる活動体名詞の活用・複数形

主.	<i>дежурные</i>	<i>больные</i>	<i>лесничие</i>	<i>Скляревские</i>
生.	<i>дежурных</i>	<i>больных</i>	<i>лесничих</i>	<i>Скляревских</i>
与.	<i>дежурным</i>	<i>больным</i>	<i>лесничим</i>	<i>Скляревским</i>
対.	<i>дежурных</i>	<i>больных</i>	<i>лесничих</i>	<i>Скляревских</i>
造.	<i>дежурными</i>	<i>больными</i>	<i>лесничими</i>	<i>Скляревскими</i>
前.	(o) <i>дежурных</i>	(o) <i>больных</i>	(o) <i>лесничих</i>	(o) <i>Скляревских</i>

名詞は、名称と形態特徴から、固有名詞と普通名詞に分かれる。普通名詞は多様な種類に属する対象や現象を名付ける。(стол, девушка, смелость) 固有名詞は個々人や対象を命名する。(Александр Сергеевич Пушкин, Москва, Днепр, Октябрь, «Известия») 普通名詞は一般に単数と複数に分かれる。(город — города, медведь — медведи) 固有名詞は、普通、数によって変化することはしない。多くそれらは単数で、希に複数でも使われる。(Киев, Одесса, Черкассы, Сумы) 固有名詞が複数挙げられることがある。(Строговы, Турбины)。

男性苗字と住民居住区の名称の活用

主.	<i>Петров</i>	<i>Никитин</i>	<i>Вирхов</i>
生.	<i>Петрова</i>	<i>Никитина</i>	<i>Вирхова</i>
与.	<i>Петрову</i>	<i>Никитину</i>	<i>Вирхов</i>
対.	<i>Петрова</i>	<i>Никитина</i>	<i>Вирхова</i>
造.	<i>Петровым</i>	<i>Никитиным</i>	<i>Вирховом</i>
前.	(o) <i>Петрове</i>	(o) <i>Никитине</i>	(o) <i>Вирхове</i>

男性苗字と住民居住区の名称の活用

主.	<i>Дарвин</i>	<i>Киев</i>	<i>Голицыно</i>
生.	<i>Дарвина</i>	<i>Киева</i>	<i>Голицына</i>
与.	<i>Дарвинау</i>	<i>Киеву</i>	<i>Голицыну</i>
対.	<i>Дарвина</i>	<i>Киев</i>	<i>Голицыно</i>
造.	<i>Дарвином</i>	<i>Киевом</i>	<i>Голицыном</i>
前.	(o) <i>Дарвине</i>	(o) <i>Киеве</i>	(o) <i>Голицыне</i>

女性苗字の活用

主.	<i>Петрова</i>	<i>Никитина</i>
生.	<i>Петровой</i>	<i>Никитиной</i>
与.	<i>Петровой</i>	<i>Никитиной</i>
対.	<i>Петрову</i>	<i>Никитину</i>
造.	<i>Петровой</i>	<i>Никитиной</i>
前.	(o) <i>Петровой</i>	(o) <i>Никитиной</i>

固有名詞の中で、人間や動物の名前、地理的・天体名称（Владимир, Жучка, Ленинград, Марс）、固有名称（журнал «Здоровье», завод «Большевик»）が区別される。

普通名詞と固有名詞の境界は可動的である。普通名詞は固有名詞へ移行し（Земля, «Об рыв»）、固有名詞は普通名詞（геркулес, донкихот, ампер）へ移行する。

普通名詞のなかに、同種対象の総体を意味する集合名詞の種類が定義される。（молодежь, беднота）。集合名詞は数え上げの対象にはならない対象の集合を名付ける。それらは複数形が存在せず、個数詞で数え上げられない。集合性の意味は接辞 -ств-, -еств-（посольство, студенчество）, -ј-（сырье, зверье）, -н-（родня, ребятня）, -от-（пехота）, -щин-（военщина）などにより伝達される。集合名詞と関連するのは、また、対象の総体を命名する名詞だが、集合性の接辞を持たない語彙である。（ботва, мебель）複数形を形成する народ, толпа, полкなどのタイプの名詞は集合名詞には属しない。

物質名詞は、可測性を受け入れるが、数えられないその構成に関して同一な物質（вода, мука, уголь）を意味する。物質名詞は単数でだけしか使わぬものと複数でだけしか用いないものとがある。（мед, ситец, белила, дрожжи）物質名詞は物質の種類や品種を意味する場合複数形を付け加える。（минеральные соли, технические масла）物質名詞は普通物質の意味を表す接尾辞を持たない。

具体的対象の名称と抽象の概念に応じて具象名詞と抽象名詞が区別される。具象名詞は個々の対象と感覚器官により知覚される現象（стол, телевизор, инженер, гроза）を意味する。具体的意味を持つ名詞は数え上げや計量ができる対象を名付ける。この様な名詞は殆ど単数と複数があり、数詞で数え上げられる。（столы, три стола）ある具象名詞では単数だけが、またあるものは複数だけが利用される。（молоко, сани）

抽象名詞は抽象的な概念、特徴、性質、行為を意味する。例えば、слава, типина, доброта, движение である。これらの名詞は数え上げができないものである。抽象名詞は普通複数形がなく、希に単数形をとる。この様な名詞の複数形は、抽象的な概念ばかりでなしに、それらの単数の現像を名付ける語彙を形成しうる。боль — боли, радость—радости などである。多くの抽象名詞は形容詞や動詞によってそれらの主題にされ、-ость-, -ств-, -ний- -щин-, -изн-, -изм; -ациј-, -к- などの接辞により形成される。（жадность, геройство,

знание, сдельщина, желтизна, марксизм, координация, разрядка)。

語彙文法特徴により名詞は活動体と不活動体に区別される。活動体名詞は人間と動物 (ребенок, агроном, овца, скворец, лещ) を名付ける。不活動体名詞は非生物的対象と抽象概念 (тетрадь, лес, злость) である。この名詞の下位カテゴリー化は現実の生物・非生物の分類と完全には一致していない。活動体名詞にはいるのはさらに神話上の存在の名称 (леший, русалка)、死人 (покойник)、人形 (матрешка)、トランプ (валет)、チェスの駒 (ферзь)、である。不活動体名詞は、植物名 (сосна, колокольчик)、生物の総称 (отряд, стая) などである。

活動体と不活動体に区別される意味はそれが文法的区別に利用される。活動体名詞は男性と女性に属し、その際、男性名詞はしばしば人間と動物の男性を名付ける。女性名詞は女性の存在を名付ける。中性名詞の中で活動体に属するのは、子供、怪物、昆虫 (дитя, чудовище, насекомое) とその他である。

活動体と不活動体名詞の活用形は次の様に複数形で異なる。名詞活動体形では対格形が複数生格形 (вижу студентов, лошадей) に一致し、不活動体では複数主格形 (вижу столы, деревья, страны) に一致する。II式活用男性活動体動詞は単数でも対格が生格に一致 (вижу друга) する形を持つ。不活動体では対格は単数主格形 (вижу дом) に一致する。これらの名詞の定語との一致形はこの差異 (встретил знакомых инженеров; купил спелые яблоки) を繰り返す。名詞が活動体か不活動体かの属性は文法的になされる。(исследовать микробы и микробов, увидел рыжика и рыжик)。

同質の量、嵩を持った物質の固まりから分離される単数の対象を意味する個別名詞の範疇が時々分離される。個別名詞は集合名詞または物質名詞から接尾辞 -ин(a), -инк(a) によって (горошина, жемчужина, соломинка) 形成される。この種の名詞の数は多くはない。

4. 3. 名詞の性の範疇

名詞の性の範疇は、三性、つまり男性 (человек, сад, народ)、女性 (птица, рожь, война)、中性 (здание, молоко, собрание) の一つに属する単数形での語形変化でない形態論の範疇である。

性の形態論的意義は一致される語形と結合する名詞 (высокий дуб, молодая женщина, синее небо) の能力を制約し、述語と一致させる (Ученик пришел; Книга прочитана; Море шумело) 能力を制約する。

名詞の性は単数の格組織によって表現されるが、しかし、名詞が単数主格でゼロ語尾の場合も (дом, сон; дверь, ночь) 表現される。語尾 -a の名詞は女性名詞であるがまれに男性名詞である場合 (страна, груша; юноша, мужчина) がある。変化語尾が -o, -e の名詞は中性名詞であるがまれに男性名詞である場合 (окно, море; домишко, подмастерье) がある。複数では性差異は文法的には表現されない。

性範疇は語形成接尾辞によって定められる。接尾辞 -тель, -никを持つ名詞は男性 (преподаватель, ударник) である。接尾辞 -ница-, -остьを持つ名詞は女性 (учительница, проводница; смелость) である。接尾辞 -ство(o) を持つ名詞は中性 (строительство) である。

人を意味する名詞は文脈に応じて男性にも女性にも現れる通性 (круглый сирота, круглая сирота) が区別される。この様な名詞は特徴的な動作や特徴に従い命名し、-a に終わる男性・女性名詞と同じ活用組織を持っている。通性名詞の結合力は普通、あげられる人物の性 (большой гуляка, большая зурила) に呼応して定められる。

多くの名詞で性の文法上の意味は含意のレベルでは動機付けられない。ただ、人や動物の意味の名詞はそれぞれ男性・女性 (муж — жена, петух — курица) に振り分けられる。中性名詞で活動体のもの (дитя, животное) はそんなに多くはない。男性・女性・中性への不活動体名詞の振り分けは意味的には、条件つきの、暫定的なものである。 (океан, река, море)。

格変化しない名詞の性は普通、それらの意味で定められる。活用しない不活動体名詞はしばしば中性 (алиби, жюри, какао) に属する。しかし、名詞 кофе, пенальти その他は男性名詞である。活用しない、人を意味する活動体名詞の性は自然性の別に依存する。動物の名称は普通男性であるが、動物の雌を表示する場合は女性 (быстроногий кенгуру, молодая шимпанзе) になる。

活用しない固有名詞の性は、それらの普通名詞の性で決められる。Баку (город) — 男性名詞、По (река) — 女性名詞、Того (государство) — 中性名詞などである。

活用のない複合縮約語の性は普通中心名詞の性による。ВЦ (вычислительный центр), АСУ (автоматизированная система управления), НСО (научное студенческое общество) この場合では、しかし、ずれや混乱も見られる。

幾らかの名詞の性は変更 (рельс — рельса, жираф — жирафа, георгин — георгина) されうる。こうした性の属性に個性ある名詞では、性の差異が意味の差 (зал — зала) に表れたり、文体の異なり (санаторий — 古い文体で用いられる。санатория, клавиш — 口語体で用いられる。клавиша) に現れたりする。

4. 4. 名詞の数の範疇

名詞の数の範疇は、单・複数対立 (стол — столы, птица — птицы, море — моря) の組織を表現する、単語活用の形態論範疇である。单・複数の意味は同種物の一つか、一以上であることの差を反映する。

单・複数の相違は单・複数の格語尾 (дом — дома, дома — домов, пчела — пчелы, пчёлы — пчел ほか) によって実現される。数のための活用に際して語幹の変更 (небо — небеса, знамя — знамена, человек — люди) を随伴することがある。一連の単語では单・複数形がそのアクセントで区別 (дом — дома, дома — домóв; рука — rúки, рукí — рук; море — мор я, моря — морéй) される。数の統語範疇は一致の方法で表現される。次の活用しない名詞のケースを参照されたい。 свободное такси — свободные такси。

一定の語彙文法範疇に属する名詞は双数形や单数または複数形だけを持つことができる。最も首尾一貫した单・複数対立は活動体も不活動体も具体的な対象を名付ける普通名詞 (болт — болты, мышь — мыши, дерево — деревья) で提示される。数についてその対立が表せない名詞があるが、それはまず、抽象概念、物質、物の総体、人間などの命名 (бедность, медь, пионерия) である。

单数は対象が一つ (книга, шкаф, человек, собака) として提示される。单数は一般的に集合した物の意味 (На месте ели и лиственницы — ценных промышленных пород,— если не вмешается человек, вырастут осина, береза, ольха (П. Прокурин)) を伝達することもできる。

複数は対象が一つ以上大きい量 (книги, шкафы, люди, собаки) であると表される。複数形は分解された対象の集合や人間や対象の総和 (грибы, ботинки, французы, солдатыなど) を伝える。

数えられず、数の相関的な形を持たない名詞の中で、单数形だけで使われる名詞と複数形だけで使われる名詞が分離される。

单数形だけで使われる名詞 (ラテン語で singularia tantum) に属するのは воронье, листва, крестьянство の様な集合名詞、железо, вермишель, шерсть のような物質名詞、Волга, Ташкент, Евгений Онегин のような固有名詞である。文脈があれば、これらの名詞は複数形を獲得する。種類品種を意味する場合、минеральные соли; 抽象概念の現れを意味する場合、Есть дружбы как родные берега (Е. Евтушенко) ほかである。

複数形だけを有する名詞 (ラテン語で pluralia tantum という) は、何か対を成すかあるいは、対を成さない対象 (очки, ножницы, вилы)、集合としての何らかの総和 (джунгли, сласти, хлопоты)、何かの物質、材料 (белила, дрожжи, опилки)、継続する過程、行為、状態 (бега, жмурки) を命名する。pluralia tantum の名詞に属する例として、幾らかの固有名詞 (Афины, Карпаты) をあげることができる。pluralia tantum の名詞の複数の意味は单語、две, три などの集合数詞と結合して (двоє щипцов и две пары щипцов) 表現される。

4. 5. 名詞の格の範疇

格の範疇とは、一連の諸形が相互に対立している組織で表現され、語結合や文中で他の单語に対するその名詞の関係を表示する、名詞の語形変化の範疇である。つまり格は意味機能の一定の総合体である。

ロシア語では、主格、生格、与格、対格、造格、前置格の六つの格が分類される。語形変化としての格は活用語尾、語幹での音韻交替、特別なアクセントの性質（*зnamя* — *знамени*, *конь* — *коня*ほか）によって表現される。それと共に格の形が同音異義化（主., 対. 前. *ночь*; 生., 与., 前. *ночи*）していることも特徴的である。

格の意味は語結合か文中で形成され、単語を修飾して実現されたり、単語につかない位置で実現（*жизнь в селе* と *В селе кипит жизнь*）されたりする。形態論では格の持つ意味は統語的結合や関係から引き離されて学習される。格の機能との関連で示される、格の最も共通の基本的意味として現れるのは、主語、目的語と定語の意味で、これらはさらなる意味の区別を可能にする。格の意味はその単語とそれに関わる他の単語の語彙・文法の関わりを考慮して作られる。

ある格の境界には種々の意味が現れるが、前置詞のない格は意味がより広汎である。これに対して、前置詞のある格の姿は格の意味をより的確に具体化し示差的にする。（*вопреки мнению, согласно распоряжению*ほかである。）同じ意味が種々の格によって伝達されうるが、ある格の意味の態勢は別の格の意味の態勢とは重複しない。

主格の意味の中心にあるのは主語と定語の機能である。主格の主語の意味は次の二肢文の主語（*Зазвучал скучный голос* (A. Алексин)）に現れる。一肢文（*Вот мой рентгеновский снимок* (E. Винокуров)）でも同様である。主格の定語の意味は名詞述語（*Она была совсем девчонка* (B. Распутин)）と付加文、同格語（*Он был выдумщик, этот мальчик* (K. Паустовский)）に現れる。主格は表題、呼びかけ、名詞文での名指しの機能（*Эй, ребятки, бцков не видали тут?* (Б- Васильев); *Река!* Ведь это неописуемо, а мы пишем (B. Кожевников).）を遂行する。

生格の基本的意味は主体、定語、客体である。生格の主体的意味は動詞から得られる名詞（*приезд сестры, пение соловья*）との結合で現れる。定語の意味は特徴、特質、性質、ある物への帰属（*Неужели все льды Арктики нельзя растопить теплом одного-единственного человеческого*

сердца? (Б. Васильев)) の意味として現れる。定語の意味は若干の動詞との結合 (желать награды) と動詞から作られた名詞との結合 (Формой проявления человеческого **безумия** мог бы счастье инопланетянин уничтожение миллиардов гектаров плодородных почв и живых лесов, отравление рек и Мирового океана (В. Чивилихин)) で提示される。

与格の基本的意味は客体と主体である。与格は行為が向けられる間接目的語 (— Извините,— сказала женщина и протянула Кузьмину руку (К. Паустовский)) と無人称文の主体 (Варе не позволяли трогать эту модель (К. Паустовский)) を意味する。

対格の基本的意味は直接目的語 (Я взял связку котелков и отправился искать воду (В. Астафьев)) である。対格の状況語的意味は周縁的 (時間、работать месяц, ждать год: 分量、重量、量 пройти километр, весить тонну, стоить рубль) である。

造格に特徴的な機能は、定語、状況語、目的語の表示である。定語的意味は述語 (Мама была машинисткой (А. Алексин)) に現れる。造格は種々の状況語的意味、行為の形成と可能性 (Все подразделения колхоза на сенокосе — действуют свободным отрядом (В. Кожевников))、比較 (Я волком бы выгрыз бюрократизм (В. Маяковский))、時間 (Погода нынешним летом выдалась — не в пример прошлогодней — засушливой... (В. Кожевников))、場所 (Юные туристы шли сначала полем, потом берегом реки)、原因 (Стыдом и страхом замираю (А. Пушкин))、量と程度 (Мы не видимся годами.) を伝える。造格の目的語 (Пришлось пожертвовать щебнем, припасенным для дорожного строительства в поселке (В. Кожевников)) が可能である。制限はあるが、主語 (По небу тучи бегают, дождями сумрак сжат (В. Маяковский)) の機能もある。

前置格の基本的意味は目的語と状況語を作ることである。前置格は発話、思考、感覚の目的を示す。Он и сейчас подумал о лете, о том, как поедет на какую-нибудь речушку (Ю. Казаков); различные обстоятельства — образ и способ действия: работать в рукавицах; время: В прошлом году комбайн

свободно управлялся со сдвоенным валком, а теперь одинарный еле одолевает (В. Кожевников); места: Татьяна Петровна решила выступать **в лазаретах** — их было несколько **в городке** — и успокоилась (К. Паустовский). 名辞に付加して前置格は一定の意味を付け加える。С мостика сбежал обветренный помощник капитана **в брезентовом плаще** (К. Паустовский).

4. 6. 名詞の語形変化

単語の格毎（時に数毎）の変化は名詞の活用（ склонение ）と呼ばれる。名詞の格の形の組織はその活用のパラダイムを構成する。共通のパラダイムを有する単語のクラスとそれに従ってそのクラスの語が変化するサンプルを名詞の活用という。単数活用のパラダイムに応じて格毎の活用をする名詞は三つの活用タイプに分類される。

I 式活用に属するのは女性、男性と -a(-я) に終わる通性名詞（ страна, земля, юноша, неряха ）である。

男性不活動体名詞の活用

主.	<i>стол</i>	<i>пляжс</i>	<i>мяч</i>
生.	<i>стола</i>	<i>пляжса</i>	<i>мяча</i>
与.	<i>столу</i>	<i>пляжсу</i>	<i>мячу</i>
対.	<i>стол</i>	<i>пляжс</i>	<i>мяч</i>
造.	<i>столом</i>	<i>пляжсем</i>	<i>мячом</i>
前.	(o) <i>столе</i>	(o) <i>пляжсе</i>	(o) <i>мяче</i>

男性不活動体名詞の活用・複数形

主.	<i>столы</i>	<i>пляжси</i>	<i>мячи</i>
生.	<i>столов</i>	<i>пляжсей</i>	<i>мячей</i>
与.	<i>столам</i>	<i>пляжсам</i>	<i>мячам</i>
対.	<i>столы</i>	<i>пляжси</i>	<i>мячи</i>
造.	<i>столами</i>	<i>пляжсами</i>	<i>мячами</i>
前.	(o) <i>столах</i>	(o) <i>пляжсах</i>	(o) <i>мячах</i>

中性不活動体名詞の活用

主.	<i>окно</i>	<i>жилище</i>	<i>домище</i>	<i>солнце</i>
生.	<i>окна</i>	<i>жилища</i>	<i>домища</i>	<i>солнца</i>
与.	<i>окну</i>	<i>жилищу</i>	<i>домищу</i>	<i>солнцу</i>
対.	<i>окно</i>	<i>жилище</i>	<i>домище</i>	<i>солнце</i>
造.	<i>окном</i>	<i>жилищем</i>	<i>домищем</i>	<i>солнцем</i>
前.	(ob) <i>окне</i>	(o) <i>жилище</i>	(o) <i>домище</i>	(o) <i>солнце</i>

中性不活動体名詞の活用・複数形

主.	<i>окна</i>	<i>жилища</i>	<i>домища</i>	<i>солнца</i>
生.	<i>окон</i>	<i>жилищ</i>	<i>домищ</i>	<i>солнц</i>
与.	<i>окнам</i>	<i>жилищам</i>	<i>домищам</i>	<i>солнцам</i>
対.	<i>окна</i>	<i>жилища</i>	<i>домища</i>	<i>солнца</i>
造.	<i>окнами</i>	<i>жилищами</i>	<i>домищами</i>	<i>солнцами</i>
前.	(ob) <i>окнах</i>	(o) <i>жилищах</i>	(o) <i>домищах</i>	(o) <i>солнцах</i>

II 式活用に属するのは单数主格でゼロ語尾の男性名詞と活用語尾 -o(-ë), -e を持つ中性名詞 (окно, ружье, поле, волнение) である。

女性不活動体名詞の活用

主.	<i>стена</i>	<i>домина</i>	<i>туча</i>
生.	<i>стены</i>	<i>домины</i>	<i>тучи</i>
与.	<i>стене</i>	<i>домине</i>	<i>туче</i>
対.	<i>стену</i>	<i>домину</i>	<i>тучу</i>
造.	<i>стеной</i>	<i>доминой</i>	<i>тучей</i>
前.	(o) <i>стене</i>	(o) <i>домине</i>	(o) <i>туче</i>

女性不活動体名詞の活用・複数形

主.	<i>стены</i>	<i>домины</i>	<i>тучи</i>
生.	<i>стен</i>	<i>домин</i>	<i>туч</i>
与.	<i>стенам</i>	<i>доминам</i>	<i>тучам</i>
対.	<i>стены</i>	<i>домины</i>	<i>тучи</i>
造.	<i>стенами</i>	<i>доминами</i>	<i>тучами</i>
前.	(o) <i>стенах</i>	(o) <i>доминах</i>	(o) <i>тучах</i>

III 式活用に属するのは、語幹が軟音かシュー音に終わるか单数主格語尾がゼロである女性名詞（степь, ночь, рожь）である。

男性・女性・中性活動体名詞の活用

主.	<i>мать</i>	<i>дочь</i>	<i>мыши</i>	<i>дитя</i>
生.	<i>матери</i>	<i>дочери</i>	<i>мыши</i>	<i>дитяти</i>
与.	<i>матери</i>	<i>дочери</i>	<i>мыши</i>	<i>дитяти</i>
対.	<i>мать</i>	<i>дочь</i>	<i>мыши</i>	<i>дитя</i>
造.	<i>матерью</i>	<i>дочерью</i>	<i>мышью</i>	<i>дитятею(-ей)</i>
前.	(o) <i>матери</i>	(o) <i>дочери</i>	(o) <i>мыши</i>	(o) <i>дитяти</i>

男性・女性・中性活動体名詞の活用・複数形

主.	<i>матери</i>	<i>дочери</i>	<i>мыши</i>	<i>дети</i>
生.	<i>матерей</i>	<i>дочерей</i>	<i>мышей</i>	<i>детей</i>
与.	<i>матерям</i>	<i>дочерям</i>	<i>мышам</i>	<i>детям</i>
対.	<i>матерей</i>	<i>дочерей</i>	<i>мышей</i>	<i>детей</i>
造.	<i>матерями</i>	<i>дочерями</i>	<i>мышами</i>	<i>детьми</i>
前.	(o) <i>матерях</i>	(o) <i>дочерях</i>	(o) <i>мышах</i>	(o) <i>детях</i>

語尾が -мя に終わる中性名詞（время, знамя, пламя ほか）と中性名詞 дитя、男性名詞 путь は特殊な活用形をとる。それらは格語尾の組織に関してみれば、III 式活用名詞に近い。

男性・女性・中性不活動体名詞の活用

主.	<i>вуаль</i>	<i>площадь</i>	<i>путь</i>	<i>время</i>
生.	<i>вуали</i>	<i>площади</i>	<i>пути</i>	<i>времени</i>
与.	<i>вуали</i>	<i>площади</i>	<i>пути</i>	<i>времени</i>
対.	<i>вуаль</i>	<i>площадь</i>	<i>путь</i>	<i>время</i>
造.	<i>вуалью</i>	<i>площадью</i>	<i>путём</i>	<i>временем</i>
前.	(o) <i>вуали</i>	(o) <i>площади</i>	(o) <i>пути</i>	(o) <i>времени</i>

男性・女性・中性活動体名詞の活用・複数形

主.	<i>матери</i>	<i>дочери</i>	<i>мыши</i>	<i>дети</i>
生.	<i>матерей</i>	<i>дочерей</i>	<i>мышей</i>	<i>детей</i>
与.	<i>матерям</i>	<i>дочерям</i>	<i>мышам</i>	<i>детям</i>
対.	<i>матерей</i>	<i>дочерей</i>	<i>мышей</i>	<i>детей</i>
造.	<i>матерями</i>	<i>дочерями</i>	<i>мышами</i>	<i>детьми</i>
前.	(o) <i>матерях</i>	(o) <i>дочерях</i>	(o) <i>мышах</i>	(o) <i>детях</i>

異なるタイプの活用の複数形のパラダイムは主格と生格（時に対格）の形で区別される。与格・造格・前置格はその形が最もよく類似しているので活用タイプの区別の際には普通利用されない。活用を分類する場合は名詞の文法性の属性（I式活用名詞に中性名詞はなく、II式活用名詞には女性名詞は存在しない。III式活用名詞は女性名詞だけである。）が考慮されるが、それは決定的というわけではない。

これら基本的な活用組織のほかに名詞化した形容詞（*больной, столовая, животное*）や形動詞がある。これらは形容詞と同等の活用をする。接辞-овまたは-инに終わる固有名詞は相関所有形容詞のように活用する。複数形だけで利用される名詞（*сани, ворота*）は格活用のタイプには分類されない。活用態勢の外にあるのは *пальто, кенгуру, Сухуми*などの非活用名詞である。

名詞の活用組織は硬変化と軟変化に別れる。硬変化は語幹が硬子音に終わる名詞（*вода, стол, ведро*）である。軟変化は語幹が軟子音に終わる名詞（*земля, конь, поле, кровь*）である。語幹が硬シュー音とцで終わる名詞は活用時には硬変化名詞として振る舞うが、伝統的記述では軟音（*ржи, мыши*）が残されている。

硬変化と軟変化が組み込まれた名詞のI式、II式、III式語形変化組織は活用モデルで伝えられる語形変化の特徴を持っている。名詞を活用させる場合一再ならず、子音と母音の交替が生ずる。これは活用形式での語幹の相関関係の一定の二者択一のメンバーとタイプ（*клок — клочья, вишня — вишен, знамени — знамена, колена — колени; рожь — ржи, счастливец — счастливца*ほか）を分離することを可能にする。名詞の多くは活動の際にアクセントは移動しない。ところがある名詞ではアクセントが語尾にあるかないかで活用形が区分される。次例を参照されたい。*трубá, трубы — трубы, труб*などである。

V ロシア語の形容詞

5. 1. 形容詞概観

形容詞は、対象から離れることなく（храбрость, голубизна）特徴を名付け、対象との関わりでそれに含まれるもの（храбрый воин, голубые главы）として名付ける。形容詞は対象の変化しない特徴を表示し、それを文法的に依存する性・数・格の範疇で表現する（высокий, молодой, деревянный, орлиный, мамин）自立的な品詞である。形容詞は対象の種々の性質や特徴（красный, сладкий, деревянный）と属性（пушкинский, отцов）を表記する。

形容詞は比較（милый — милее, более милый — милейший, самый милый）語尾と長語尾・短語尾（тесный — тесен, смелый — смел）の組織を持っている。文中で形容詞は普通、限定辞（За столом в библиотеке **худенькая** девушка застенчиво подняла на Костю **большие спокойные** глаза（Б. Васильев））または合成述語の名辞部分（Голос у него был очень **красивый, громкий, деревенский**（Ю. Коваль））として現れる。普通形容詞は名詞と結合して、それらと性・数・格（высотный дом, высотного дома, высотному дому, высотным домом, о высотном доме, высотных домовなど）で一致する。

順序形容詞 *третий* の活用

	男性形	中性形	女性形	複数形
主.	<i>третий</i>	<i>третье</i>	<i>третья</i>	<i>третьи</i>
生.	<i>третьего</i>	<i>третьего</i>	<i>третьей</i>	<i>третьих</i>
与.	<i>третьему</i>	<i>третьему</i>	<i>третьей</i>	<i>третьим</i>
対.	<i>как И. или Р.</i>	<i>как И.</i>	<i>третью</i>	<i>как И. или Р.</i>
造.	<i>третьим</i>	<i>третьим</i>	<i>третьей</i>	<i>третьими</i>
前.	(o) <i>третьем</i>	(o) <i>третьем</i>	(o) <i>третьей</i>	(o) <i>третьих</i>

形容詞の構成要素の中に順序形容詞（数詞）と代名形容詞（代名詞）が含まれる。前者は数える場合に数と対象との状態の関係（второй, десятый, сотый）を定める。後者は性質や特徴に関わるのではなく、対象そのもの（мой, каждый, всякий, самый, этотほか）を示すために用いられる。近年 *хаки*, *бордо*などの活用しない形容詞で外国語語源のグループが発達してきた。

-ов/-ев-, -ёв-; -ин-/ын-, -нан- に終わる物主形容詞の活用

	男性形	中性形	女性形	複数形
主.	<i>отцов</i>	<i>отцово</i>	<i>отцова</i>	<i>отцовы</i>
生.	<i>отцова</i>	<i>отцова</i>	<i>отцовой</i>	<i>отцовых</i>
与.	<i>отцову</i>	<i>отцову</i>	<i>отцовой</i>	<i>отцовым</i>
対.	<i>как И. или как Р.</i>	<i>как И.</i>	<i>отцову</i>	<i>как И. или как Р.</i>
造.	<i>отцовым</i>	<i>отцовым</i>	<i>отцовой</i>	<i>отзовыми</i>
前.	<i>(об) отцовом</i>	<i>(об) отцовом</i>	<i>(об) отцовой</i>	<i>(об) отцовых</i>

形容詞はその語彙文法上の範疇として、形態的特徴に応じて、二つの語彙文法上の種類、性質形容詞と関係形容詞が分類される。物主形容詞はこの場合、関係形容詞に属する。関係形容詞にはまた順序語と代名形容詞が含まれる。(形容詞は性質・関係・物主形容詞の三分類が一般的である。)

5. 2. 性質形容詞

性質形容詞は他の対象と無関係にその対象に本質的な特徴を表示する。それは、強さのいろいろな程度によって(сладкий, менее сладкий, более сладкий, самый сладкий)修飾されうる。性質形容詞は意味の点で対立し得るので、その反意語の対が形成される。Ее томило странное предчувствие: что-то должно произойти, с ней ли с одной или со всем домом, **хорошее** или **дурное**, **радостное** или **печальное**, она не знала, но что-то непременно произойдет (Ю. Нагибин).

性質形容詞は二つの形、長語尾形と短語尾形(высокий — высок, мягкий — мягок, узкий — узок)、比較の程度(сильный — сильнее — сильнейший, короткий — короче — кратчайший)を持つ。性質形容詞は語尾 -о, -е で副詞(холодный — холодно, искренний — искренне)を、接辞 -изн-, -от-, -ость, -ств(o) で抽象名詞(крутой — крутизна, красный — краснота, молодой — молодость, одинокий — одиночество)を形成することができる。性質形容詞は派生力のない語幹(храбрый, новый)を持つ場合も、派生力ある語幹(герой — геройский, радость — радостный)を持つ場合もある。この

タイプの形容詞は副詞によって修飾（очень добрый, весьма признателный）され、依存語を統語関係（готовый к борьбе, решительный в делах）に入れられる。

しかしすべての性質形容詞が示されたような特徴を完全に持っているわけではない。幾らかの形容詞は短語尾（дружеский, вороной）を持たず、反意語のペアー（желтый）を持たず、主体評価の形（искренний）がない。しかしこれらの形容詞は性質に関わる共通の意味を伝える。性質形容詞の範疇は形動詞（волнующее событие, блестящий оратор）や性質の意味を付け加える関係形容詞（золотое сердце, телячья нежности）によって補われる。

5. 3. 関係形容詞

関係形容詞は特徴 — 物質（железный, деревянный）、人間（детский, докторский）、動物（орлиный, змеиный）、場所（придорожный）、時間（вчерашний）、度量衡（килограммовый）—、或いは他の特徴との関係 — 行為（стиральный, питательный）、抽象概念（философский）—を通して間接的にその特徴を表記する。関係形容詞は異なる強度で現れえない特徴を命名する。性質形容詞とは異なり、この形容詞は反意語の対を作らず、短語尾、主体評価の形を持たず、名詞を形成せず、副詞に修飾されない。関係形容詞は生産力豊かな語幹を持っている。それらは名詞（окно — оконный, учитель — учительский, орел — орлиный）・動詞（вязать — вязальный, гладить — гладильный）・副詞（завтра — завтрашний）をもとに形成される。多くの関係形容詞は前置詞付き・前置詞なしの名詞の斜格と同義関係（золотое кольцо — кольцо из золота, морской берег — берег моря）にある。関係形容詞のカテゴリーは積極的に補われている。幾らかの性質形容詞（мягкий знак, тяжелая промышленность）もまた関係形容詞の意味に利用されうる。

性質形容詞と関係形容詞の意味文法的な境界は確立されてはいない。関係形容詞は転義の性質の意味を発達させることができる。железнaya руда — железный характер, сердечная мышца — сердечный человек。転義で用いられる多くの関係形容詞は性質形容詞の形態特徴を付け加える。この様な関係形容詞は短語

尾形や比較級を形成することができる。Деревянен братец твой, деревянен ... мозги у него прямые какие-то (Л. Леонов); Походка его становилась все деревяннее (В. Короленко)。

関係形容詞に含められるものに、活動体の対象の特徴を意味する物主形容詞がある。 бабушкин сад, сестрина книга, отцова шинель, медвежья берлога。

-ов/-ев-, -ёв-; -ин-/ын-, -нин- に終わる物主形容詞の活用

	男性形	中性形	女性形	複数形
主.	сестрин	сестрино	сестрина	сестрины
生.	сестрина	сестрина	сестриной	сестриных
与.	сестрину	сестрину	сестриной	сестриным
対.	как И. или как Р	как И.	сестрину	как И. или как Р
造.	сестриным	сестриным	сестриною(-ой)	сестриными
前.	(о) сестрином	(о) сестрином	(о) сестриной	(о) сестриных

具体的で単数の意味は接尾辞 -ов, -ев, -ин, -нин を持つ物主形容詞で伝えられる。(дедов, тестев, дядин, мужнин) 現代語ではこの様な形容詞の利用は制限される傾向にある。По маминому чертежу я быстро отыскал дедушкин домик (А. Алексин); Я знаю жизнь. Но сыну моему, увы, не надо знания отцова (Е. Винокуров)。さらに次のような成句での利用を参照されたい。ахиллесова пята, анютины глазки, крокодиловы слезы。

-ий -ин-/ын-, -нин- に終わる物主形容詞の活用

	男性形	中性形	女性形	複数形
主.	птичий	птичье	птичья	птичи
生.	птичьего	птичьего	птичьей	птичьих
与.	птичьему	птичьему	птичьей	птичьим
対.	как И. или Р.	как И.	птичью	как И. или Р.
造.	птичьим	птичьим	птичьей	птичьими
前.	(о) птичьем	(о) птичьем	(о)птичьей	(о)птичьих

接尾辞 -j- (-ий, -ья, -ье) を有する形容詞は「一般的一族、種族の」属性を伝達する。この様な形容詞は容易に性質形容詞(заячий тулуп)や関係形容

詞（ лисьи повадки, заячья душа; лисья шуба ）の意味を伝える。 Шуба-то лисья, да душа-то крысья (Ф. Решетников); В нем жил заячий испуг (М. Горький)

5. 4. 形容詞の形態論範疇

形容詞の性、数、格の範疇は「文法的依存」の分野である。それらは統語論的に、形容詞の修飾される名詞との一致によって分類される。

形容詞の性は、相互に対立する諸形で表現され、形容詞の名詞に対する関係を表記する語形変化の範疇である。形容詞の性の範疇は男性、女性、中性形の一連の諸形によって表現される。各の性の形は形容詞によって名指される特徴が男性、女性、中性の名詞によって名指される対象に属することを示している。

人を名指す名詞との結合では形容詞はその人の性を示す。名詞が活用しない場合（ знаменитый конферансье ）、通性名詞の場合、職業の種類を意味する名詞（ круглая сирота, известный инженер ）では、形容詞は人の性の単数の指標となる。形容詞は任意の非活用の名詞の性の指標（ чудесный кофе, сладкое какао ）である。

形容詞はそれらが結合される名詞の活動体・不活動体の意味を伝える。男性单数対格と複数の形は活動体名詞を修飾する形容詞で、生格形（ вижу молодого человека, вижу веселых подруг ）と一致し、不活動体名詞を修飾する形容詞では主格形（ вижу красивый пейзаж, вижу высокие горы ）と一致する。

硬子音に終わる語幹を持つ形容詞の活用

	男性形	中性形	女性形	複数形
主.	добрый	добroe	добрая	добрые
生.	доброго	доброго	доброй	добрых
与.	доброму	доброму	доброй	добрым
対.	как И. или как Р.	как И.	добрую	как И. или как Р.
造.	добрым	добрым	доброй	добрыми
前.	(o) добром	(o) добром	(o) доброи	(o) добрых

格変化しない名詞との結合では形容詞の格の諸形はその名詞が活動体か不活動体であるかを示す单なる指標 (вижу красивого эму, вижу больших шимпанзе) である。

形容詞の数の範疇は、单数と複数の二つの形で表現され、修飾される名詞の形態上の意味を表示する語形変化 (большой дом — большие дома, высокая сосна — высокие сосны, голубое озеро — голубые озера) の範疇である。

もし対象が無変化名詞で命名されるなら、形容詞の单数・複数形はこれら名詞の单なる数の指標 (новое пальто — новые пальто, взрослый шимпанзе — взрослые шимпанзе) でしかない。複数でのみ使われる名詞の結合では複数形の形容詞の諸形は修飾される対象の複数 (новые ворота, красивые очки) を示すわけではない。

軟子音に終わる語幹を持つ形容詞の活用

	男性形	中性形	女性形	複数形
主.	вечерний	вечернее	вечерняя	вечерние
生.	вечернего	вечернего	вечерней	вечерних
与.	вечернему	вечернему	вечерней	вечерним
対.	как И. или Р.	как И.	вечернюю	как И. или Р
造.	вечерним	вечерним	вечерней	вечерними
前.	(o) вечернем	(o) вечернем	(o) вечерней	(o) вечерних

形容詞の格の範疇は、格の諸形が対立の形で現わされ、修飾される名詞と関連する形容詞の一致を表示する語形変化 (интересный рассказ, интересного рассказа, интересному рассказу, интересным рассказом, об интересном рассказе) の範疇である。形容詞の格の表現手段として单数形の格の諸形（男性名詞、女性名詞、中性名詞）と複数形の諸形（これら三性に共通である。）が現れる。

形容詞は格と数、さらに一人称では性に関して活用する。形容詞長語尾の活用形は单数で同時に性・数・格を、さらに複数形で数と格についてそれらの意味を表現する。性質形容詞、関係形容詞、接尾辞 -ов, -ев, -ин, -ј- を持つ物主

形容詞は活用に特性を持っている。

性質形容詞、関係形容詞の長語尾形は、三つの部類、硬変化、軟変化、混合変化で提示される一つの形容詞の活用語尾に纏められる。硬変化で活用するのは、語幹が硬子音に終わる形容詞（сильный, сильного, сильному, сильным, о сильном; каменный, каменного, каменному, каменным, о каменном）である。軟変化で活用するのは形容詞の語幹が軟子音（синий, синого, синему, синим, о синем; осенний, осеннего, осеннему, осенним, об осеннем）に終わる場合である。混合変化で活用するのはシュー音 г, к, хと цに終わる語幹の形容詞である。单数形でそれらは硬変化（мягкого）に従い、文語では軟変化（хорошего, куцего）に一致する。複数では軟変化または硬変化（мягких, хороших, куцых）で活用する。

物主形容詞は、形容詞にも、名詞にも特徴的な格の形を両立させる混合変化を構成する。一つの部類に従っては、接辞 -j- と -ин(-нин) に終わる形容詞（волчий, сестрин, братнин）が活用し、別の部類に従っては、接尾辞 -oa と -ев に終わる形容詞（отцов, тестев）が活用する。時に接尾辞 -ин, -нин を持つ形容詞（мужнин）は別のパターンで活用する。

形容詞のあるもの（беж, клеш, модерн, нетто ほか）は活用しない。

5. 5. 形容詞の長語尾・短語尾形

多くの性質形容詞は長語尾のほかに、短語尾を持つ。单数男性形容詞短語尾はゼロ語尾（ряб, синь）を有し、中性形（рябо, сине）では語尾 -o, -e を、女性形（ряба, синя）では語尾 -a (-я) を有する。複数形（рябы, сини）では語尾 -ы, -и を有する。

短語尾はすべての性質形容詞にあるわけではない。特徴がとても高い程度に現れることを意味する形容詞（большущий, здоровенный）には短語尾形は存在しない。また動物の毛の色（буланый, вороной）、色彩（оранжевый, шоколадный）、さらに関係形容詞から性質形容詞へ変化した形容詞（боевой, родной）にも短語尾形を欠くものがある。ある形容詞は特定の意味の場合においてのみ短語尾形を持つ。бедный は「豊かでない」という意味の場合だけ

беденと бедныйの両形があるが、「哀れな」という意味の場合は短語尾形が存在しない。形容詞長語尾と短語尾で意味が分かれる(правと правый)ことがある。

形容詞短語尾は性と数で活用するが、格活用しない。斜格の形容詞短語尾形(на босу ногу, по белу свету)は成句の成分でのみ使用される。短語尾形は長語尾形と統語機能に関して区別される。長語尾形は定語の機能と合成述語の名辞部分の機能(Она раскрывала дневник и глядела на злосчастную отметку так, словно читала трагическое известие (А. Алексин); Катя счастливая, правда? (Б. Васильев))で現れる。形容詞短語尾形は述語の名辞部分の機能(Ты не согласна? (Б. Васильев))で現れる。定語の役割で形容詞短語尾は口語民衆詩(красна девица, сине море)では用いられる。また成句中(средь бела дня)でも用いられる。

長語尾と異なり、形容詞短語尾は一定の時に結びつけられる質的状態として特徴を捉える。つまり、恒常的でない特徴を伝える。Он злой и Он зол。短語尾はより文語的である。

ある種の短語尾形容詞(рад, люб, горазд, надобен)は相当する長語尾形を持っていない。

形容詞短語尾形の形成は一再ならず、長語尾の語幹の相違(маленький — мал, большой — велик)、出没母音の出現(узкий — узок, светлый — светел)、アクセントの移動(умный — умён, умна́, умны́; острый — остéр, острá, острý)と関わっている。

5. 6. 形容詞の比較機能

性質形容詞はほかの対象でのその出現に関係なく、対象の特徴(красíвее, более храбрый, самый красивый, храбрейший)を記述する。性質形容詞のこの特徴を、比較の程度の語形変化の範疇として考察出来る。それは比較の程度の形態論的意味を持つ一連の相互に対立した諸形により作られている。原級、比較級、最上級が分類される。形容詞の原級はほかの対象に対して比較せずに(высокий юноша, белая береза)対象の特徴を伝達する。この肯定的程度

はその特徴が対象にあることを確言し、比較の特に行うものではないが、それは比較のほかの形と一致するものである。比較級の形容詞はほかの対象でよりも多くか、少なく、ある対象に現れる特徴を記述するか、同じ時間での別対象の特徴を記述する。 — Ты, Антипычг **старше** нас,— говорили мы... (М. Пришвин); И ему захотелось быть **лучше и человечнее** и делать все так, чтобы ей было хорошо (Ю. Казаков). 初期的類似の形容詞は最も大きい規模 (Отныне и вечно мы' будем стоять перед глазами человечества как **самые сильные и справедливые** люди на земле (П. Павленко)) でその対象で表される特徴を表記する。

形容詞の比較は二つのタイプについて行われる。原級と比較級 (смелый — смелее) である。接尾辞 -ейш-, -айш- を伴う形容詞 (главнейший, величайший) はこの様なアプローチの場合の **большущий**, **здоровенный**, **превеселый** タイプの形容詞と相関している。つまり、語形成タイプ (Я понял, что совершил **грубейшую** ошибку (К. Паустовский); А я любзиком — **преотличнейший** отдых (А. Алексин)) として考察されるのである。比較の限度外に導き出されるのは語 **самый** と形容詞原形との結合 (**самый сильный**, **самый молодой**)、語 **весь** の生格形と形容詞比較級との結合 (**всего дороже**, **всех милее**) である。語 **более** または **менее** (それらは、語彙的意味と見なされる) と形容詞原形との結合 (**более надежный**, **менее устойчивый**) は比較級形として識別されない。

比較級の統語形式は性、数、格の意味を持たず、不変化詞に属する。これらの形式の形成は規則性で区別されない。比較級形は接尾辞 -ee(-ей), -e, -ше で形成される。生産的なのは接尾辞 -ee(-ей) で、語幹の最終子音に接合される。 **умный** — **умнее**, **смелый** — **смвлее**。生産的でない接尾辞 -e は **г**, **к**, **х**, **т**, **д**, **з**, **ст**, **ск** で終わる語幹を持つ形容詞から比較級を形成する。その場合以下のような子音の交替が生ずる。 **тугой** — **туже**, **легкий** — **легче**, **глухой** — **глуше**, **молодой** — **молже**, **простой** — **проще**。僅かな形容詞は接尾辞 -ше により比較級を形成する。個別の場合次のような補充の方法が用いられる。 **тонкий** — **тоньше**, **далекий** — **дальше**。時に次のような平行形 (**далее** и **дальше**,

более и больше) が許容される。比較級の統語形はすべての性質形容詞から形成されるわけではない。

比較級の類似形は性・数・格で活用する。それらは語 более и менее で形成される。 более молодой, менее впечатлительный。同様な形式は種々な方法で現れる特徴の意味を伝える任意の性質形容詞から生産される。

形容詞最上級は性・数・格で活用する。最上級の総合的形式は接辞 -ейш- と -айш- により形成 (тяжелейший, высочайший) される。(г, к, х の後ろでは ж, ч, щ に交替) 最上級の場合に、形容詞 высший низший, лучший, худший が用いられる。Пусть пока это мечта неосуществленная, но ведь стремление постичь непостижимое — высшее в человеке (В. Кожевников)。最上級形は性質の最も高い程度の意味を強める接辞 наи- を添える。наисильнейший, наиважнейший。すべての性質形容詞が最上級の統語形 (геройский, робкий, глазастый, плечистыйほか) を有するわけではない。

最上級類似の形式は語 самый, наиболее, наименее によっても形成 (самый известный, наиболее точный) される。最上級の文語形では代名詞 всего, всех と形容詞比較級 (всего дороже, всех милее) を含むことができる。語 самый, наиболее, наименее を持つ類似の形式はより大きいかより小さい程度で現れる特徴を伝えるすべての性質形容詞から形成される。

比較級の分析的形態と最上級の総合的形態は文語的である。

VI おわりに

本稿では東スラヴ語の一つのロシア語と南スラヴ語のブルガリア語の名辞類について考察した。その結果、東スラヴ語では総合タイプの道を歩んでいることは明白であり、南スラヴ語でもその一つのブルガリア語では分析タイプを志向する傾向にあることが諒解出来た。さて言語の発展の状況を類型学の観点から分析する場合の主要な問題点は、よく知られているように、それぞれの言語の標準語の分析ばかりではなく、実際にいろいろな人がいろいろなところで使われている言葉を調べて、その実体を明らかにする必要があることにある。しかし、方言の研究は統語環境に関してこれまで殆ど考察されなくて來なかつた。

これまでこの方面的研究は音韻論、形態論、語彙論に集中されてきた。例えば、各地域の現実資料が十分検討されておらず、方言統語論に関する我々の情報が不十分であるため、ロシア学では、ロシア語の方言の統語環境の完全な記述ですらまだ、実現されずにいる。これからの方言学は言語的イディオムを含めて取り上げると共に、最小限、『システムの記述』のケース（要素の存在が一つでもあれば書き留められる）と『用法の記述』のケースを区別して進める必要がある。それで、バルカン諸言語文法の構築には、バルカン標準語とともに、『バルカン的要素』からなる基本的バルカン方言の文法記述をくまなく実行しなければならない。標準語の発展は方言を徐々に、均等化してきたが、しかし、今日までまだ、ブルガリア語の方言の差異は極めて大きい。現代ブルガリア語の方言は二つの基本的グループに分類することができる。西と東である。この分割の基本にあるのはいわゆる、*ять* の境界である。

西方言では文字 **ѧ** (ヤッチ) で現れる一般スラヴ語の位置に今日、常にどの音韻的な状態でも母音 [e] が認められる。 лето, летен。

ブルガリアの東側では古代の **ѧ** は母音 [a] に変わる。もっとも、東方言の大部分でこの反射作用はアクセントがあり、さらに、硬子音の前の状態のみで現れ、その他のすべての場合に自分の場所を [e] に譲る。лято,しかし летен である。

ヤッチの種々の反射作用、 лето, летен または лято, летен は単に条件つきの特徴だけでなく、ブルガリア語会話の組織化に適切だからである。ヤッチの境界は他の、音韻論の、形態論の、語彙論の束、つまり同一の言語現象を持つ地域を示す方言地図の線によって、さらには民俗学データによって立証される。それで、ヤッチはボルガルのより古代の民族言語学上の階層分化を反映していると見なすことができる。

西方言は北西方言と南西方言に細分される。これらの対立の基礎にあるのは文字 **ѫ(オン)** で表される古代の鼻にかかった音（鼻母音）の反映であろう。西南方言では、この音は特殊な生成の母音 [ъ] に変わり (ръка, зъб) 、南西方言では、響きが [a] と合致した。рака, заб。

東方言の枠では以下の様な内部の分類が存在する。ミジ一方言（北部）、バルカン方言（中央部）、ルプスク方言（南部）である。これらのグループの個々は語彙の独自性ばかりでなく、一定の音韻的形態論的特性により特徴付けられる。（なかでも、ルプスク方言の大多数には次の様な [a] 音のヤツチの統一的な反映、*лято, лятен*）現代ブルガリア語の標準基準は主に東方言のバルカン地方のものを基礎に形成されている。こうした方言の分析を、バルカン諸語との相互関係から現地での聞き取り調査から、分析する必要がある。

参考文献

- [1] Богдановић Н. Говори Буџума и Белог Потока // Српски діалектолошки зборник. Кн». XXV. Београд, 1979.
- [2] Върху някои тюркски думи в българския език // Български език. Кн. 2. 1977;
- [3] Демина Б.И. Тихо-нравовеский дамаскин. Болгарский памятник XVII в. София, 1968.
- [4] Добрев Ив. За тюркизмите в българския език и роднинското име -- еца. Български език. 1984. №2.
- [5] Ерен Х. Турски приноси към българския етимологичен речник. Изследования върху историята и диалектите на българския език. София, 1979.
- [6] Маслов Ю.С. Очерк болгарской грамматики. М., 1956.
- [7] Милетич Л. Източно-българските говори. 2-е изд. София, 1989.
- [8] Молова М. Относно ориенталските заемки в Български тезлевен речник // Български език. XIV. 1964.
- [9] Норман Б.Ю. Болгарский язык. изд БГУ М. 1980.

- [10] Рускова М.П. Турецкие заимствования в болгарских письменных памятниках XVIII в. // Советская тюркология. 1973. И'2.
- [11] Стайнова М. За пейоризацията на турцизмите в българския език // Български език. XIV. 1964.
- [12] Стойков Ст. Българска диалектология. 3-е изд. София, 1993.
- [13] Тодоров Т. Три заемки от турски в български език // Филология. 1980. №7.
- [14] Петканова-Тотева Д. Дамаскините в българската литература. София, 1965.
- [15] Пипер П. Граматичке структуре македонског и српскохрватског језика: основна диференцијирања // XVIII Научна дискуема (Охрид, 12—14 август 1991 г.). Скопје, 1992. С. 45-51.
- [16] Цивъян Т.В. Синтаксическая структура балканского языкового союза. М., 1979. С. 213.
- [17] Цонев Б. Турски думи в българский език // Годишник на Софийския университет. Кн. XXV. София, 1929.
- [18] Адмони, В.Е Статус обобщенного грамматического значения в системе языка // Вопросы языкоznания“, 1975, N 1.
- [19] Астафьевая, Н.И., Козырева, Т.Е Современный русский язык. Наречие. Категория состояния. Минск. 1973.
- [20] Бабкин А.М. Русская фразеология, ее развитие и источники, Л., 1970.
- [21] Бабов, К. Проблемы интерференции в процессе обучения русскому языку в болгарской школе. С, 1974.

- [22] Бабов, К. Изучение русской падежной Системы в болгарской школе. С, 1978.
- [23] Барлас Л.Г. Русский язык. Стилистика. М., 1978.
- [24] Белошапкова В. А. Современный русский язык. Синтаксис. М., 1977.
- [25] Блажев, Б.И., Йотов, Ц.Д. Синтаксис современного русского языка. С, 1992.
- [26] Бондарко, А.В., Буланин, Л.Л. Русский глагол. Л., 1967.
- [27] Бондарко, А.В. Теория морфологических категорий. Л., 1976.
- [28] Бондарко, А.В. Грамматическое значение и смысл. Л., 1978.
- [29] Бондарко Л.В. Звуковой строй современного русского языка. М., 1977.
- [30] Будагов, Е.А. К теории синтаксических отношений // Вопросы языкознания, 1973, № 1.
- [31] Валгина Н.С. Синтаксис современного русского языка. 2-е изд. М., 1978.
- [32] Виноградов, В.В. Русский язык (грамматическое учение о слове). М., 1972.
- [33] Воробьева, ЕФ., Панюшева, М.С., Толстой, И.В. Современный русский язык. Синтаксис. М., 1975.
- [34] Гак, В.Е Теоретическая грамматика французского языка. Морфология. М., 1979.

- [35] Гак, В.Е Теоретическая грамматика французского языка. Синтаксис. М., 1981.
- [36] Галкина-Федорук, Е.М., Горшкова, К.В., Шанский, Н. М. Современный русский язык. Лексикология. Фонетика. Морфология. М., 1958.
- [37] Гвоздев, А.Н. Современный русский литературный язык., ч. 1, М., 1973.
- [38] Георгиев, С. Морфология на съвременния български език (неизменяеми думи). С., 1983.
- [39] Георгиев, С. Българска морфология. В.Търново, 1993.
- [40] Гловинская, М.Я. Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола. М., 1982.
- [41] Горбачевич К. С. Нормы современного русского литературного языка. М., 1978.
- [42] Гочев, ГН. Род имен существительных на -ъ. Пособие для самостоятельной работы. Велико Търново, 1982.
- [43] Гочев, ГН. За окончанието на руските съществителни pluralia tantum в родителей падеж // Руски и западни езици, 1982, бр. 4-5.
- [44] Грамматика русского языка, т.1-2, М., 1960.
- [45] Грамматика современного русского литературного языка. М., 1970.

- [46] Граудина, Л.К., Ицкович, В.А., Катлинская, Л.П. Грамматическая правильность русской речи: Опыт частотно-статистического словаря вариантов. М., 1976.
- [47] Гужва, Ф.К. Современный русский литературный язык. Синтаксис. Киев, 1971.
- [48] Зализняк, А.А. Русское именное словоизменение. М., 1967.
- [49] Зализняк, А.А. Грамматический словарь русского языка. М., 1977.
- [50] Золотова, Г.А. очерк функционального синтаксиса русского языка. М., 1973.
- [51] Ижакевич Г.П. Кононенко В.И. Русский язык. К. 1982.
- [52] Исаченко, А.В. Грамматический строй русского языка в со-
поставлении с словацким. Морфология. Часть первая.
Братислава. 1954.
- [53] Киселева, Л.А. Вопросы теории речевого воздействия. Л., 1978.
- [54] Клобуков, Е.В. Теоретические проблемы русской
морфологии. М., 1979.
- [55] Кодухов, В.И. Введение в языкознание. М., 1979.
- [56] Козырева, Т.Г., Хмелевская, Е.С. Современный русский язык.
Имя прилагательное. Имя числительное. Местоиме-
ние. Минск. 1972.
- [57] Комарова, М.В. Углубленное изучение морфологии. Местоиме-
ние // Русская словесность, 1995, № 4.

- [58] Кузнецова, Э.В. Части речи и лексико-семантические группы слов // Вопросы языкоznания, 1975, № 5.
- [59] Милославский, И.Г. Морфологические категории современного русского языка. М., 1981.
- [60] Мучник, И.П. Грамматические категории глагола и имени в современном русском литературном языке. М., 1971.
- [61] Рожкова, Г.И. Очерки практической грамматики русского языка. М., 1987.
- [62] Розенталь, Д.Э. Практическая стилистика русского языка. М., 1987.
- [63] Розенталь, Д.Э. Русский язык: Пособие для поступающих в вузы. М., 1994.
- [64] Русская грамматика, т. I, II., М., 1980.
- [65] Русская грамматика (ред. Н.Ю.Шведова и В.В.Лопатин). М., 1990.
- [66] Русский язык (ред. проф. Л. А. Максимов). М., 1978.
- [67] Русский язык по данным массового обследования (ред. Л.П.Крысин). М., 1974.
- [68] Русский язык конца XX столетия (1985 - 1995). М., 1996.
- [69] Современный русский язык. Морфология. (ред. В.В. Виноградов). М., 1952.
- [70] Современный русский язык. ч. 1 (ред. Д.Э. Розенталь). М., 1976.

- [71] Современный русский язык (ред. В. А. Белошапкова). М., 1981.
- [72] Суник, О.П. Общая теория частей речи. М.-Л., 1966.
- [73] Супрун, А.Е. Части речи в русском языке. М., 1971.
- [74] Тагамлицкая, ГА. Современный русский литературный язык. С., 1972.
- [75] Чеснокова, Л.Д. Русский язык: Трудные случаи морфологического разбора. М., 1991.
- [76] Чеснокова, Л.Д. О новой лингвометодической концепции преподавания морфологии // Русская словесность, 1995, № 4.
- [77] Шанский, Н.М., Тихонов, А.Н. Современный русский язык. Словообразование. Морфология. М., 1981.
- [78] Энциклопедия “Русский язык”. М., 1997.
- [79] Языковая системность при коммуникативном обучении. М., 1988.
- [80] Янко-Триницкая Н. А. Русская морфология. М., 1982.
- [81] Pete Istvan. *Orosz-magyar egybeveto alaktan*. Budapest, 1984.
- [82] 山口 巍 「古スラブ語における、所謂行為名詞 n/t-ie の機能について」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』 第4巻第2号 1983
- [83] 山田 勇 「СВЯЗКАについて」『香川大学教育学部研究報告』, I部, 1972, № 32
- [84] 山田 勇 「賓辞の名詞化考」『香川大学一般教育研究』 №26 1984
- [85] 山田 勇 「状態概念について」『香川大学教育学部研究報告』 I部, №72 1988